



江戸名所図會

二十

JL 4

3605

20



ル 4
3605
20



土質文庫

昭和九年四月五日
三上茂吉氏
蔵



夕顔觀音堂 新宿の渡口より半道より西北の方中川の堤

傍に飯塚村とありあり本多聖觀世音ハ金像ふ

市丈五寸計ありと云されとも深く内龕に秘しと拜

をゆきす別は慈覺大師の刻の觀音の木像を以て合龍前

安を相傳へ此地ハ昔莊官関口氏某う采地あり

墳墓の旧址なりと 往古関口氏此地に就く熊野權現及び水神

等の社を創し 此叢祠其社前は老松と榎樹の二樹の雙立する

あり春夏ハ枝葉焦悴秋冬ハ翠色を増え人以此奇ありと

又此樹間時とて光を發し或ハ龍燈の梢にかゝるを

寛文八年戊申関口氏此地の醫生深谷氏と共に相謀り此

樹下を堀り一二の佛具を得り 深谷氏ハ紀州の産なり

祠の傍に住む翁温素より信心なり目蓮の是必古時此地に有名の寺院

ありと云と云く竟は同年六月六日謹く猶此土中を堀りに

金像の大非の像一軀を獲り 佛像背面は弘長二年二月仍直ふ

深谷氏の家に移し假し佛壇に安を相好端嚴実ハ凡工の

所造よりあり然るに前宵深谷氏老翁温共夢の

應あるを以て奇ありと 竟は此地を闢く草堂を

營し此靈像を遷し 此像ハ弘長二年二月

按は世々々々觀音の像ハ瓢風の中より出現し

猿侯 新宿より北の方の邑名なり

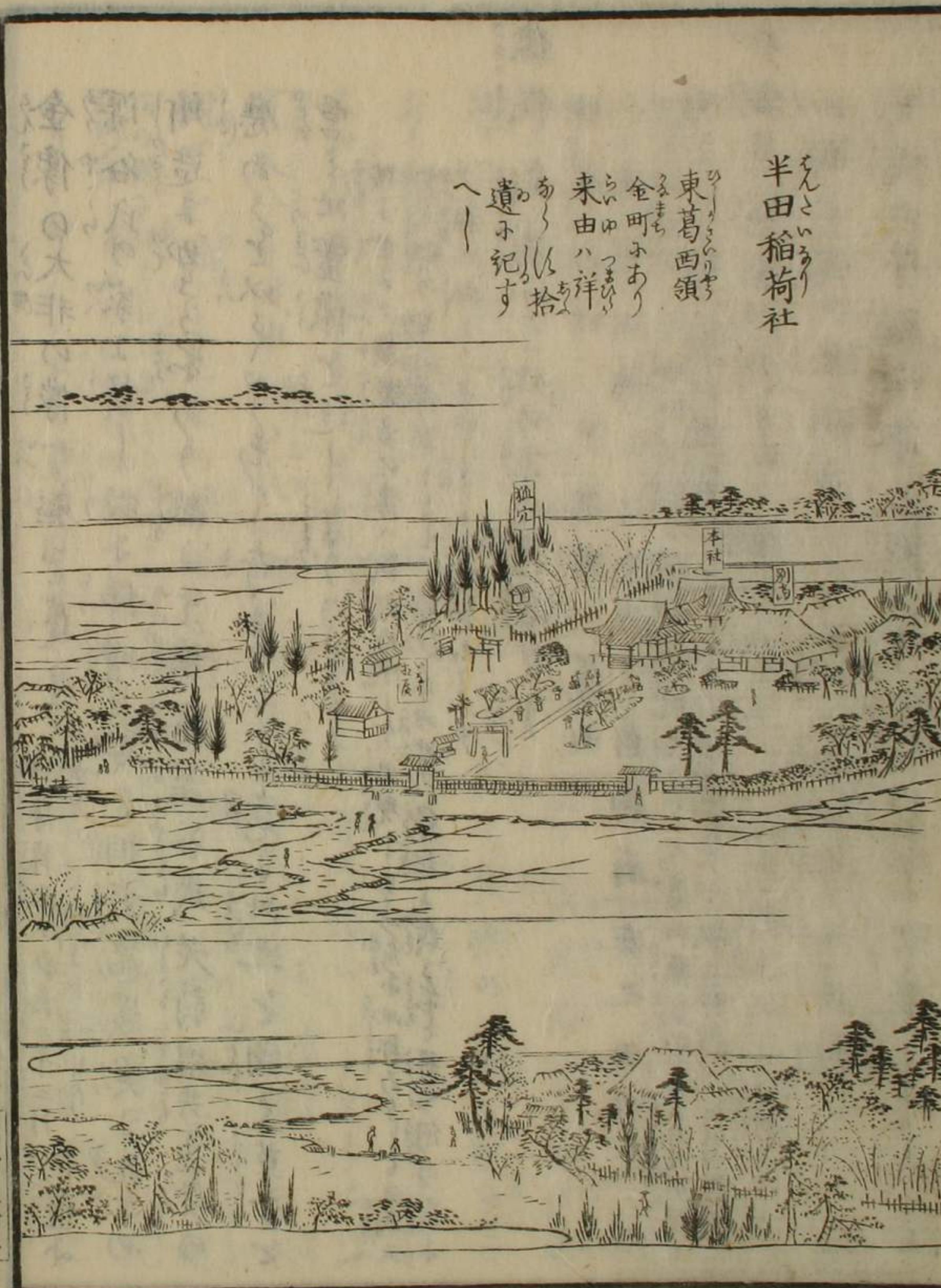
神 鳳抄曰 下總國 葛西

猿侯 御厨 百八十丁 新御厨 在之 云云

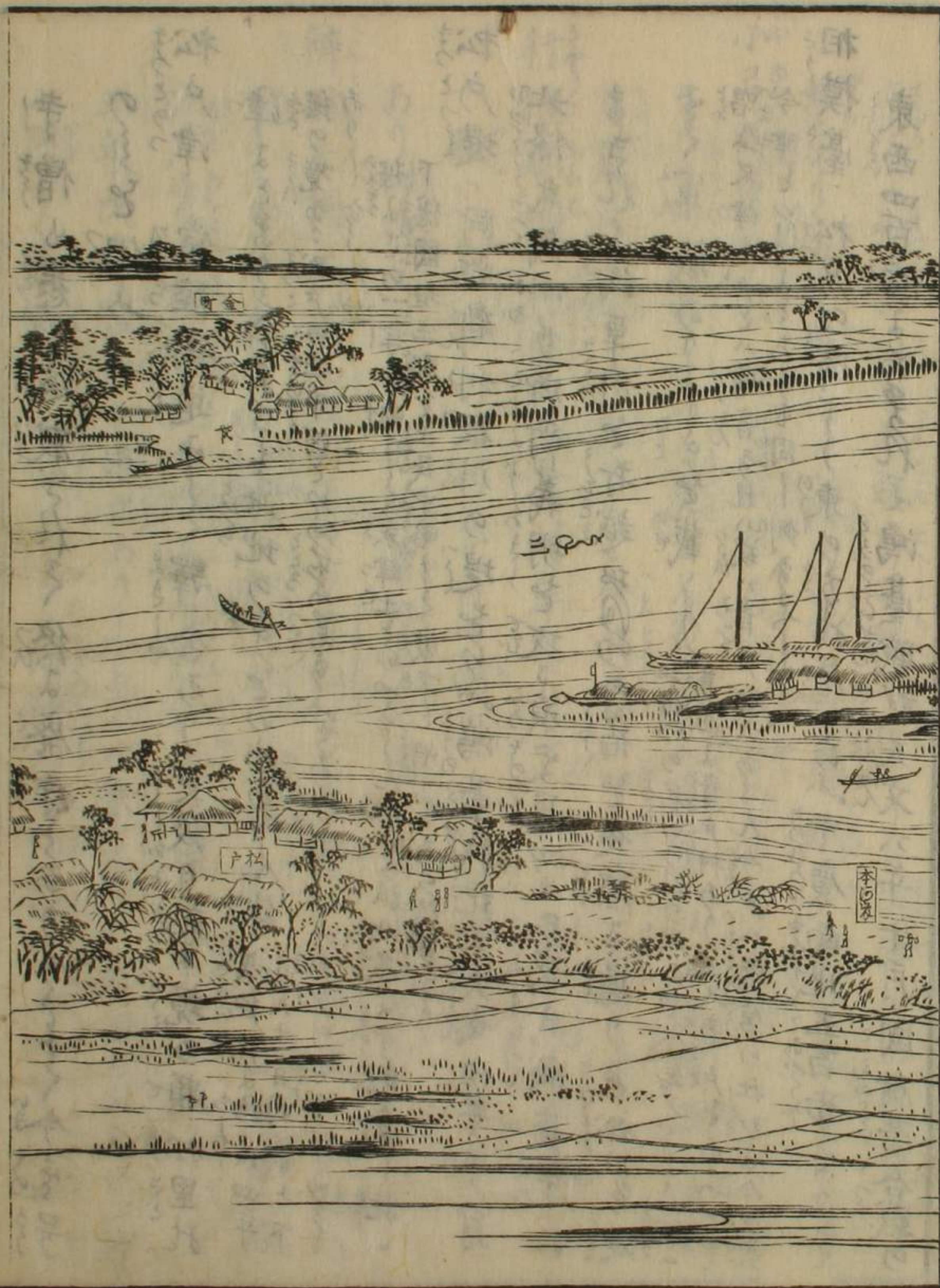
和銅寺廢址 同所あり 佛生山と号し 真言の古藍なり

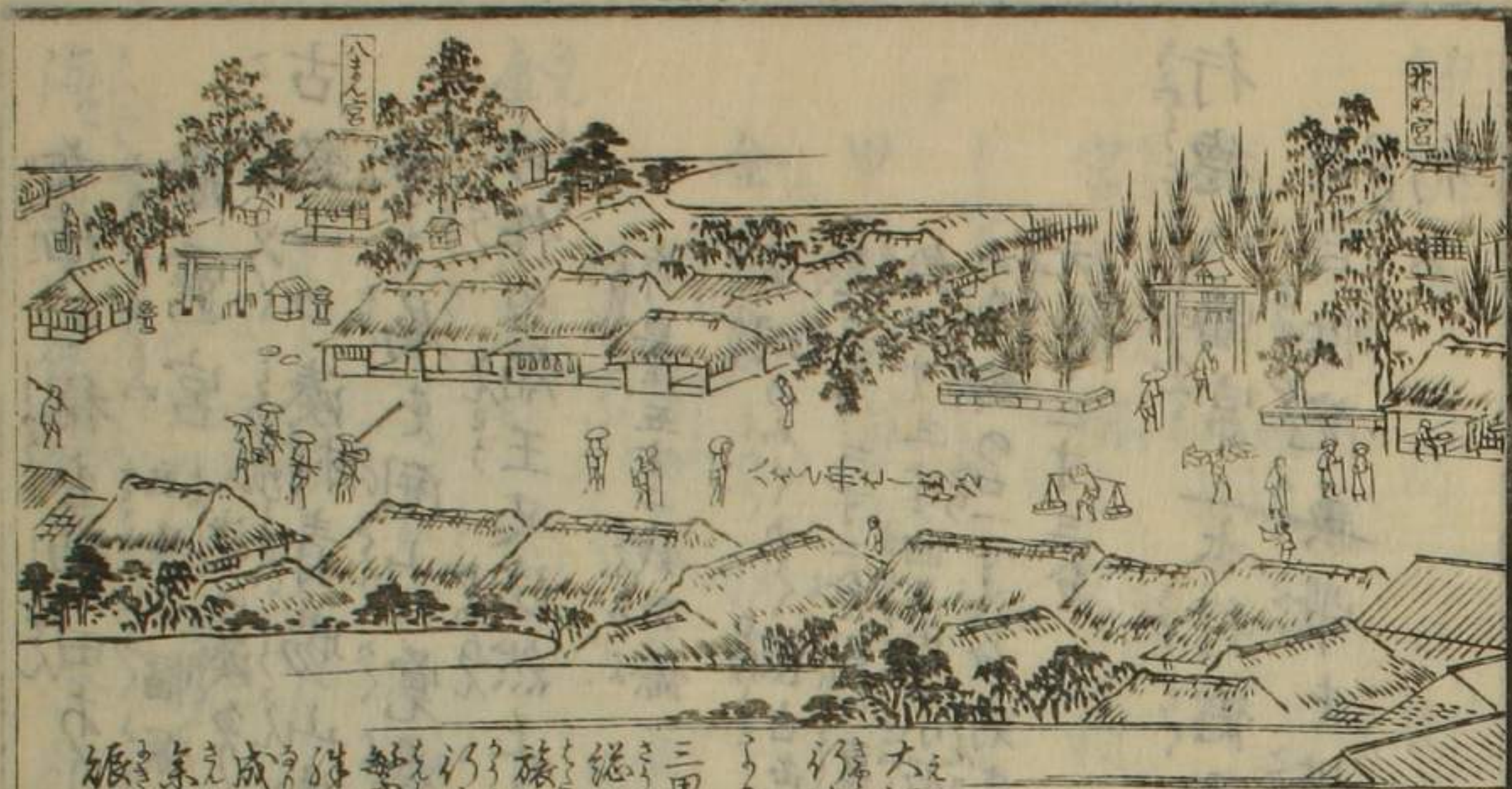
和銅年間の草創ありと云傳へ中古迄ハ伽藍巍々たり

天文六年國府臺合戦の時兵火の爲ハ灰燼となり

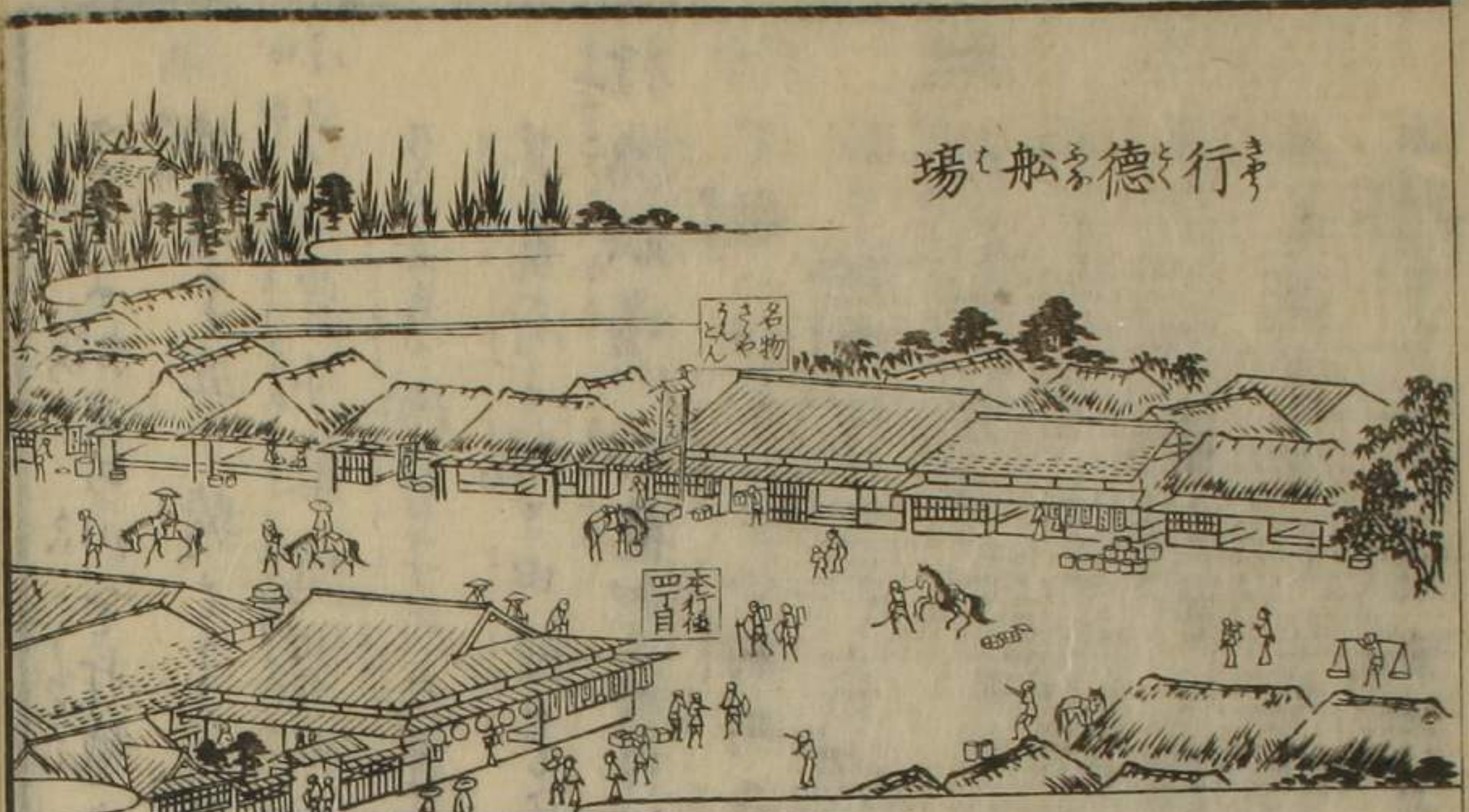
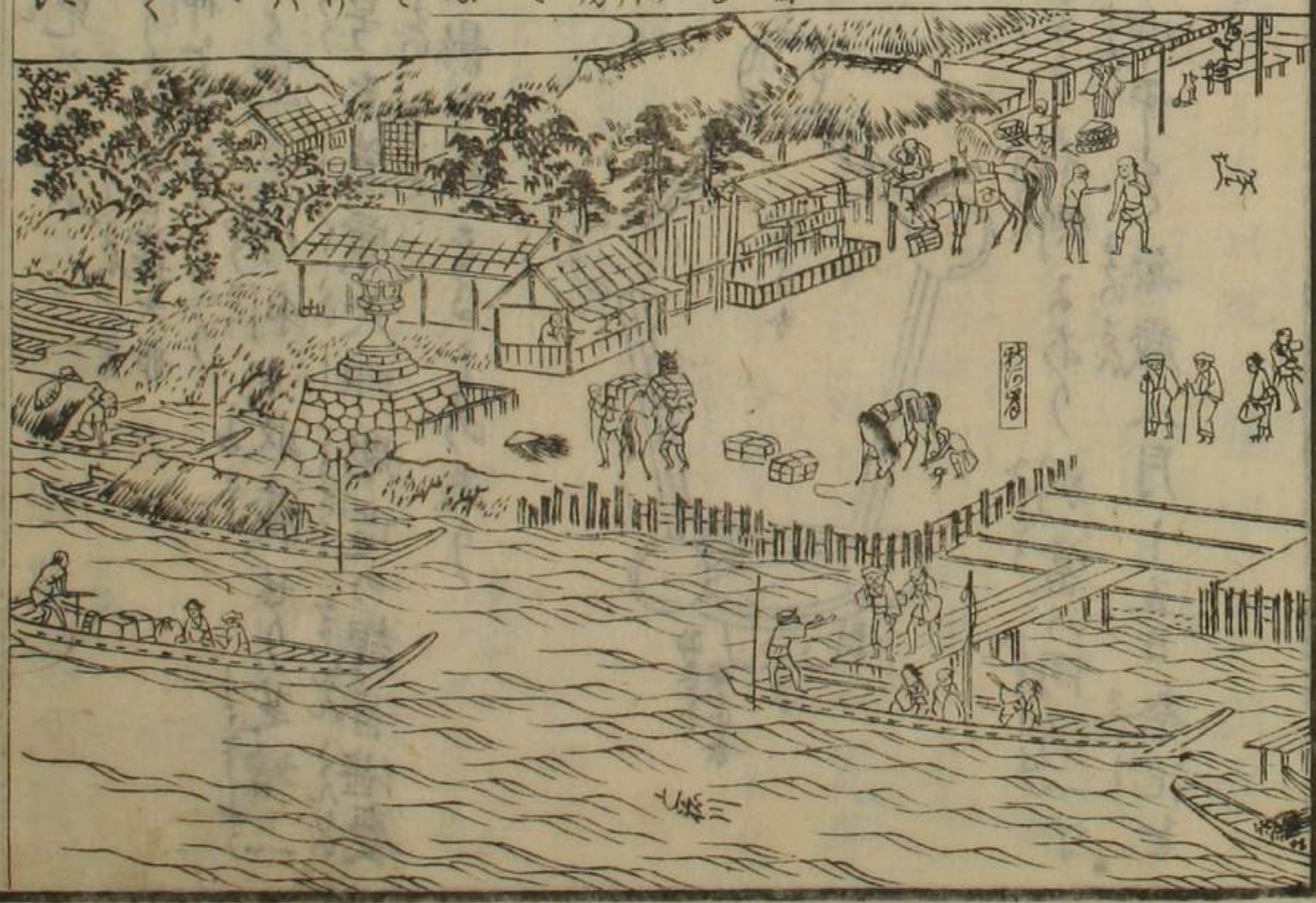


半田稻荷社
 東葛西領
 金町あり
 来由ハ洋
 あり拾
 遺小紀す
 へー

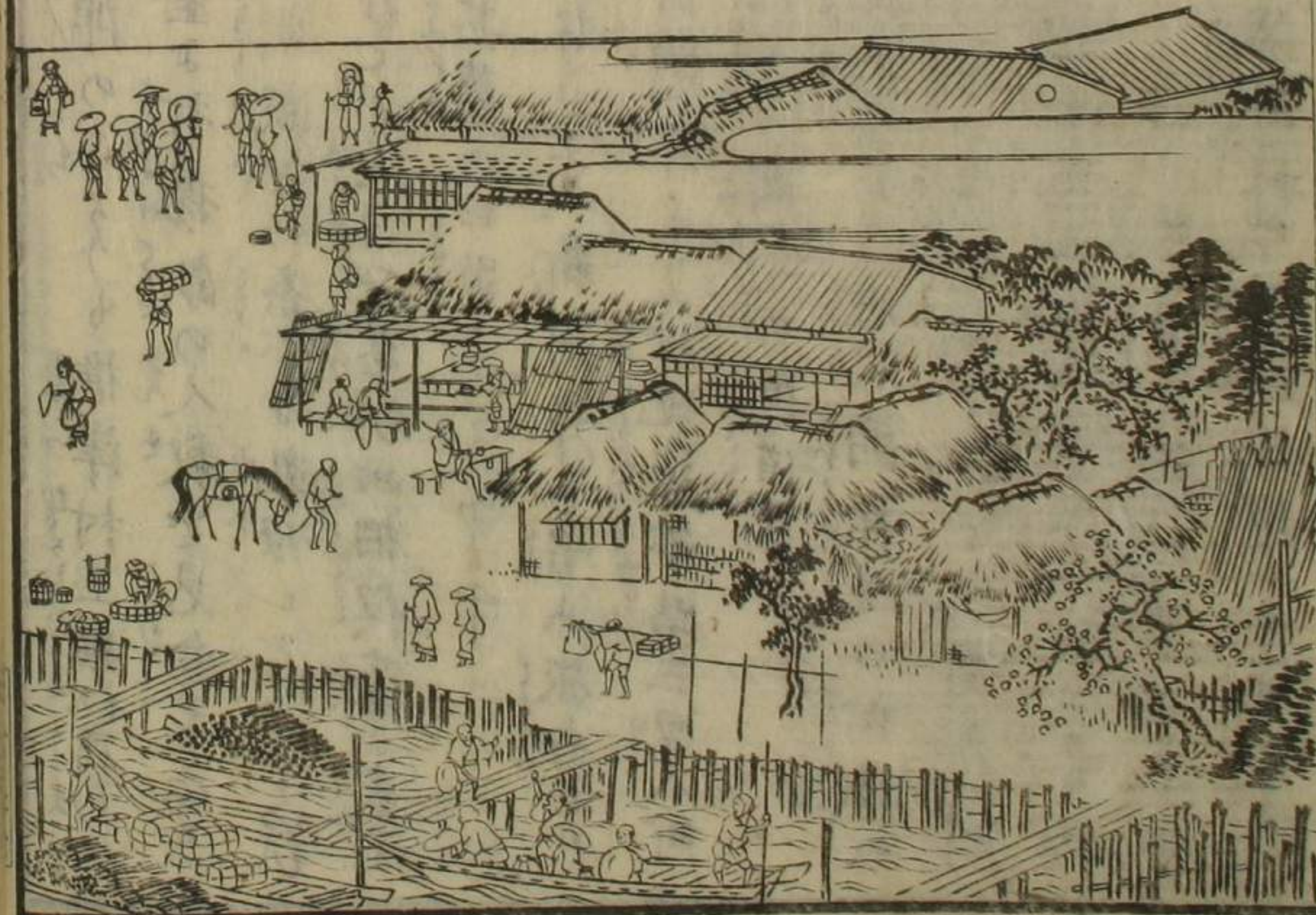




大江戸小細三目
 江の邊とていへる
 三里八丁あり房
 総の路路ありて
 旅亭ありあま
 人絡繹とて
 繁昌の地なり
 成田不動尊へ
 参詣の人夥しく
 賑ひ大方



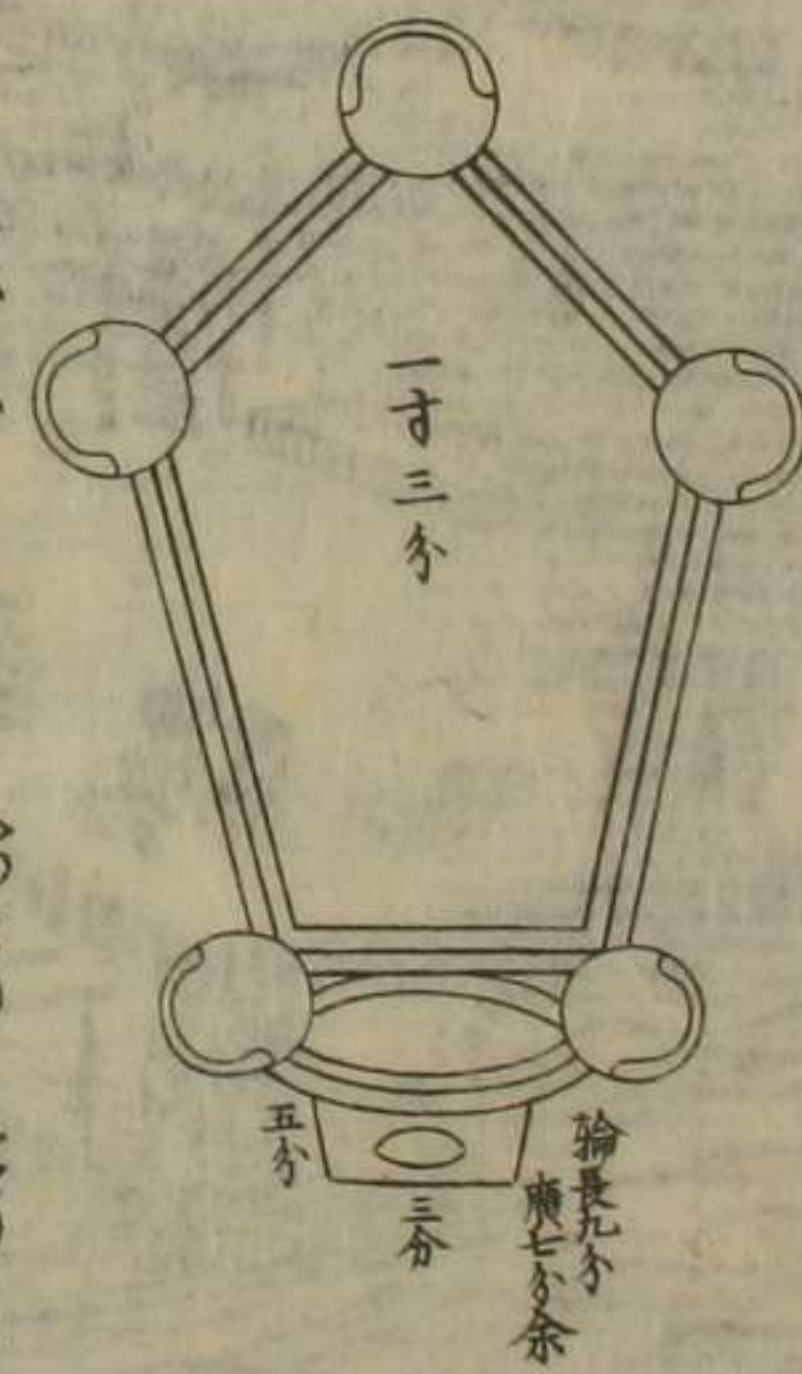
行徳船場



女神と称を神田あり弁天免と唱ふ
 船靈宮 画像一幅探信の事ありと云ふ古此地大船
 古鈴一口湊村青陽山善照寺と云ふ浄刹は収蔵せり芝増上
 寺は属を開山ハ覺譽上人と号を慈覺大師彫造の觀音湛慶
 の作の焰王又法然上人鑑御影と称するものあり

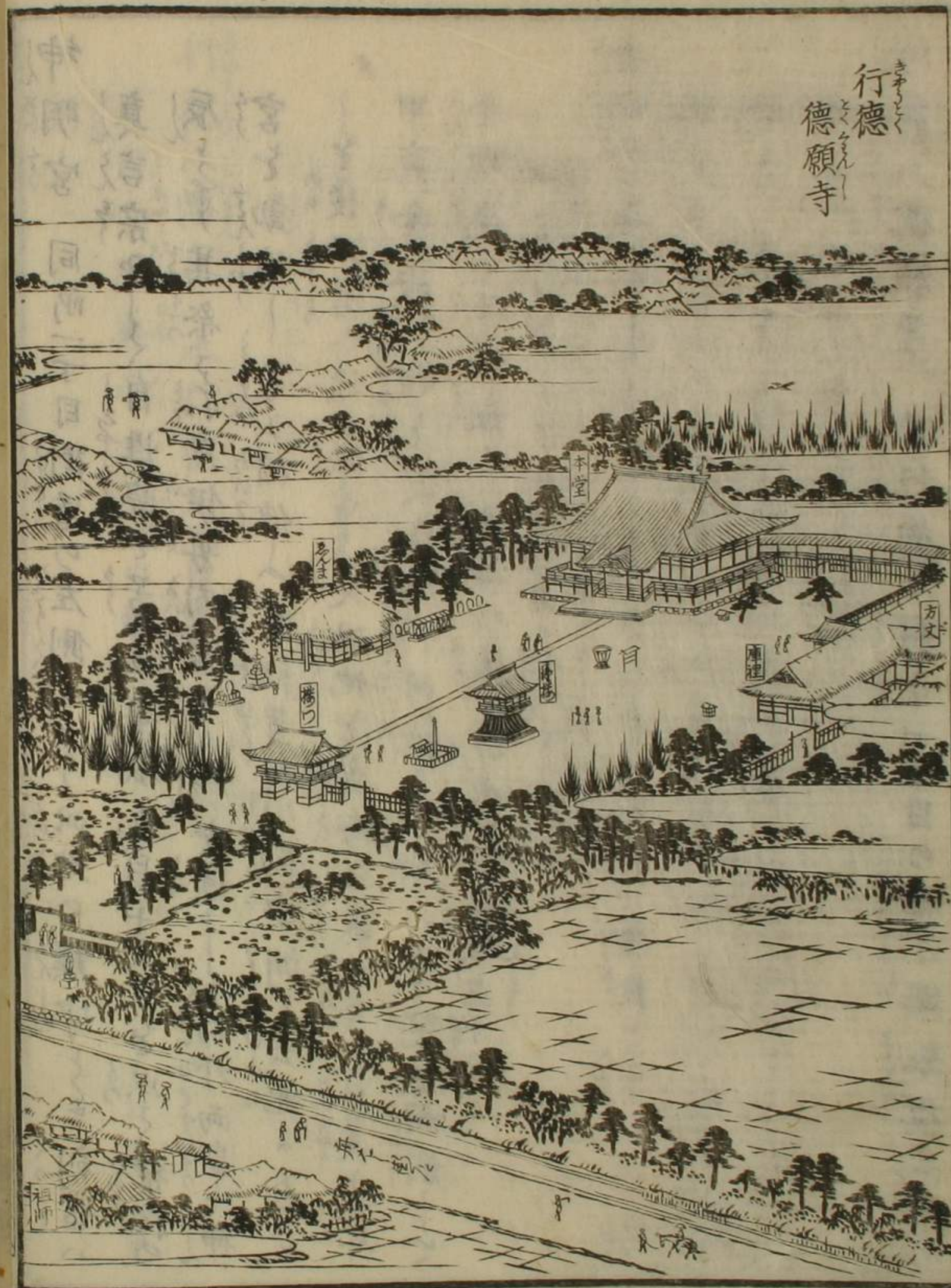
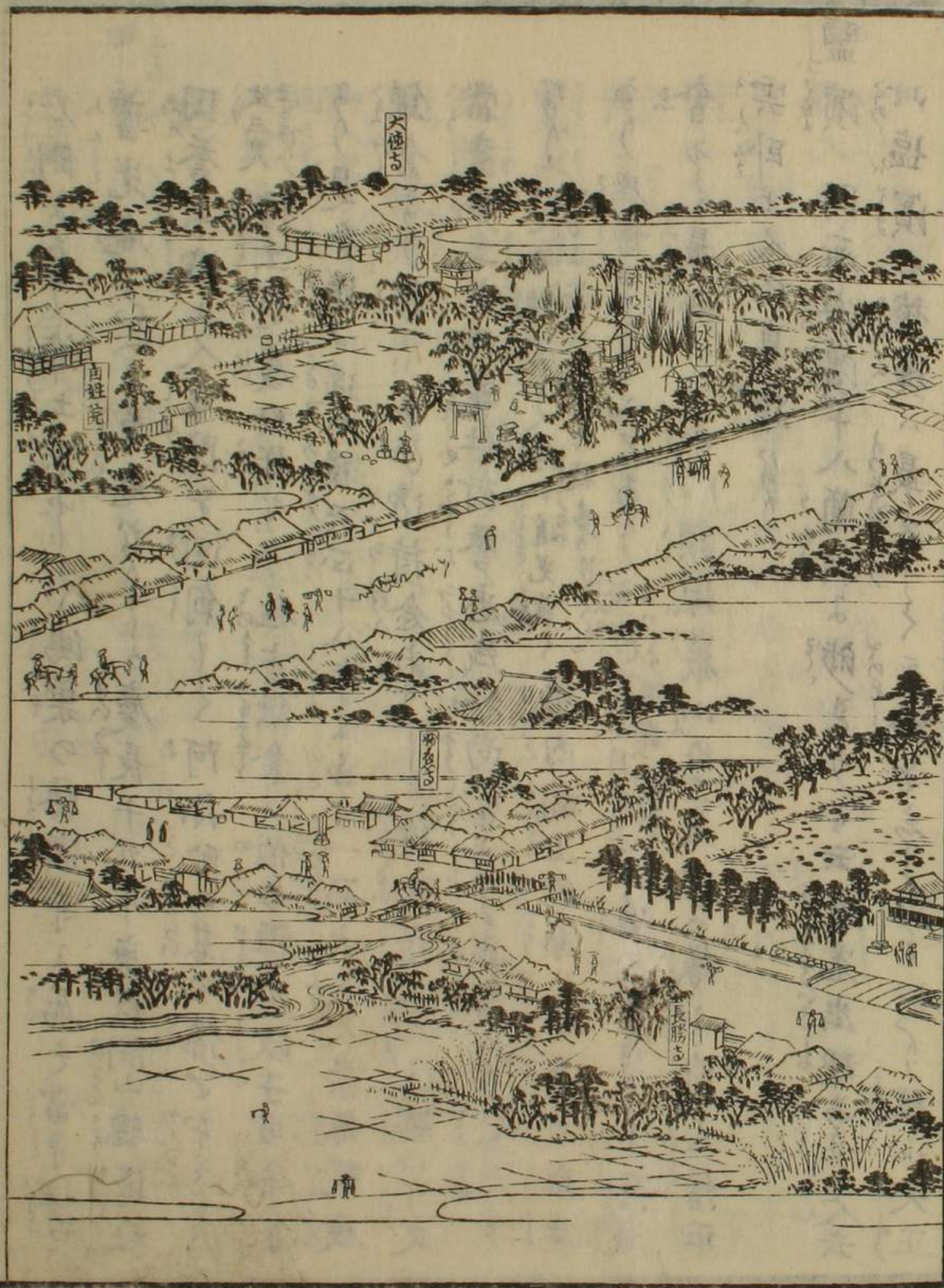
斤量五十二錢目餘

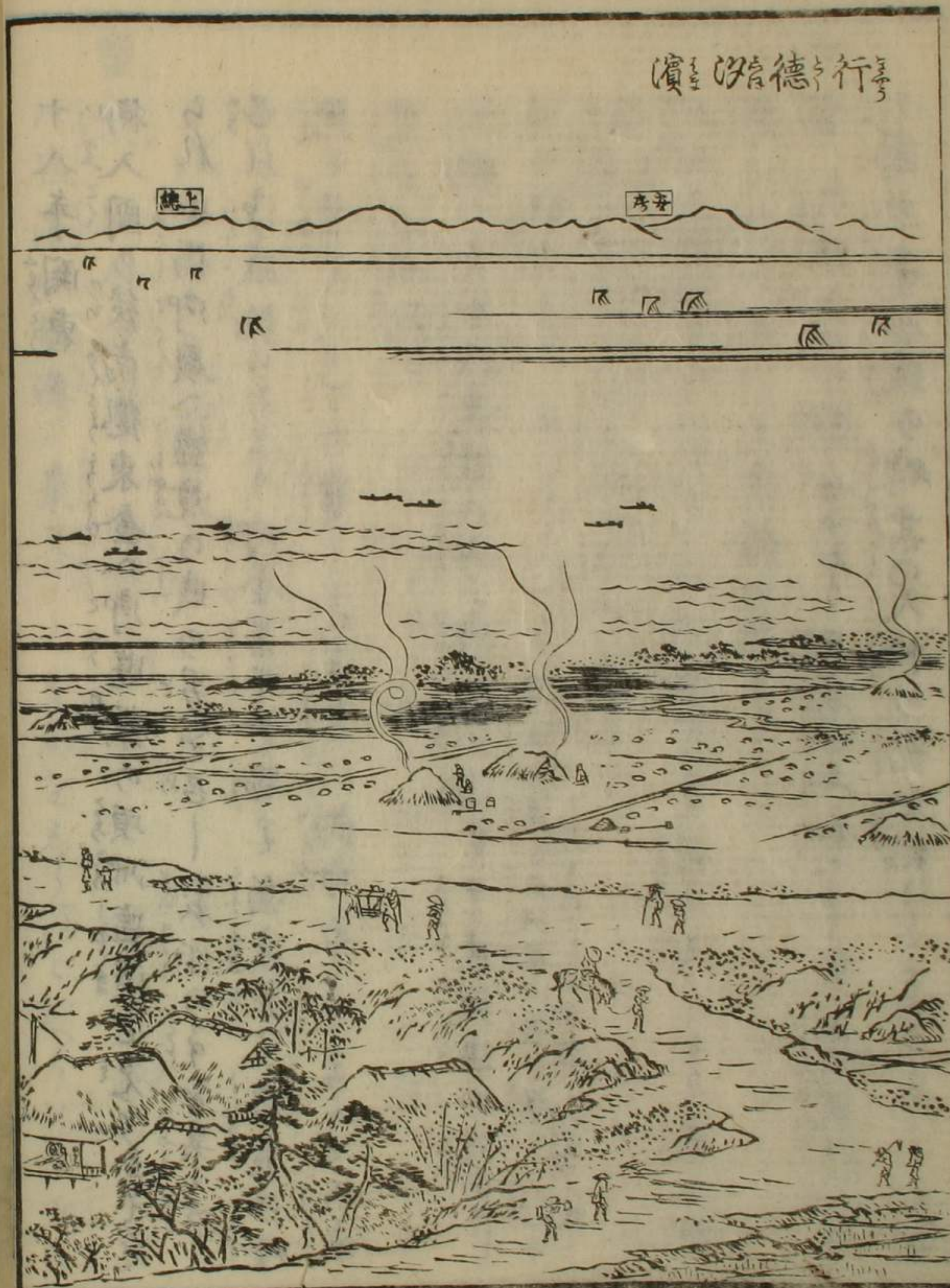
唐銅のやくやく甚古色あり
 惣長サ三寸二分劍の裏延板
 鈴大サ三寸四寸内小石一宛
 あり鈴の口寸八分劍先より
 元まで二寸三分

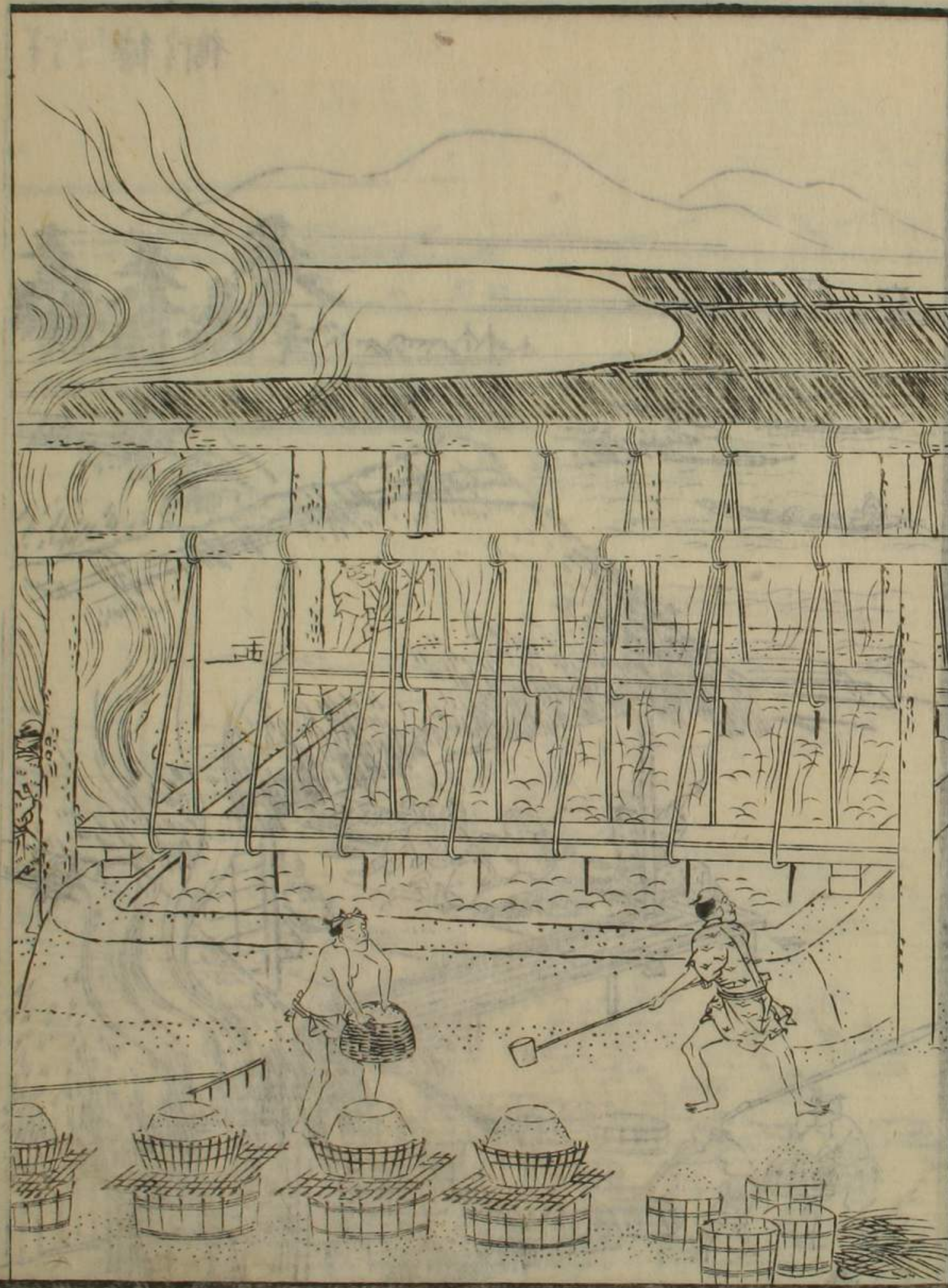


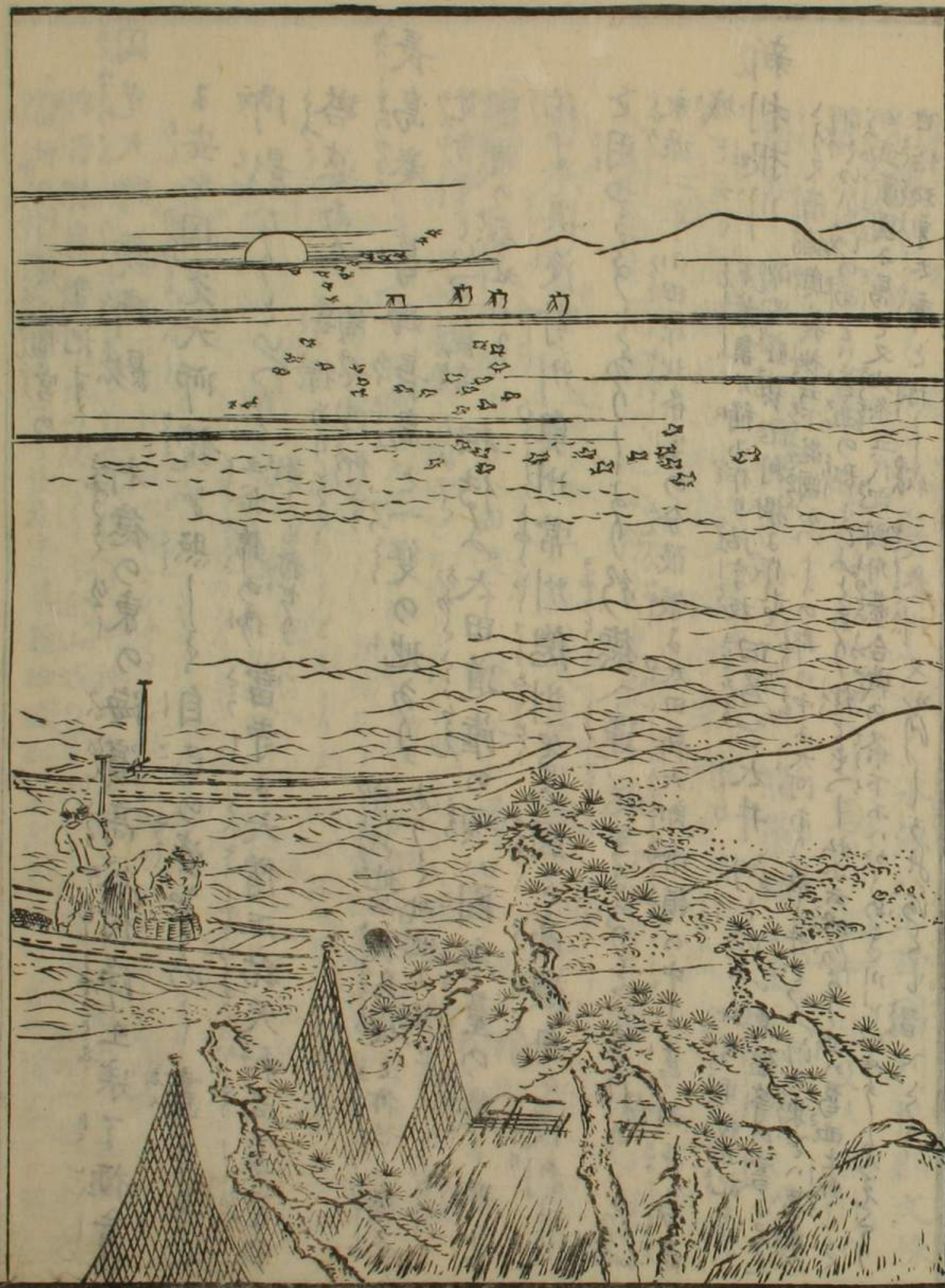
行徳八幡宮 本行徳三丁目道より右側はあり別當八同所一丁
 目自性院 兼帶此地の鎮守やと云ふ毎歲八月十五日祭祀を
 行ふ

神明宮 同所一丁目街道の左側はあり此地の鎮守と云ふ別當ハ
 真言宗中々自性院と号す毎歲九月十六日を以て祭祀の
 辰とす其祭の所を伊勢内宮の土砂を迂して内外兩皇大神
 宮を勧請しと云ふ相傳ハ當社昔ハ川向中洲と云地はあり
 一と後此所へ遷せり又此地を金海の森と号く慶長十九年
 甲寅金海法印と云ふ沙門此地は一字の寺院を開創して
 金剛院と号し依る金海の森と云ふを金剛院今ハ
 按ハ葛西志と云ふ書ハ行徳ハ金剛院の開山基
 礎地と云ふことありと云ふ由記せり
 金剛院廢址 當寺より南の方ハあり市村屋敷と字せり是
 則先より此地の金剛院の旧地なり金剛院ハ羽州羽黒山法
 漸寺は属と云ふ其昔ハ徳有驗の山伏住しと云ふに
 竟ハ此地名とあると云ふ云々
 海巖山徳願寺 本行徳の驛中一丁目の横小路船橋間道の









行徳衛



四光大師鏡師影

子安を回光大師

鏡を照しく自己の姿をもつて畫をみる

土俗錦の所
影と云ふ称せり
當寺は大僧正祐天和尚真孝の

りしとく
仰す
つとく
ち
けう
ぢや
也、
あーまふ
は
き
下ろ
り
夏三め

長島湊 葛西長島と一雙の地あり

昔山地を長島殿と稱せし領主ありき地を住せしと云ふ

梵音寺とのつゝ観音
靈蹟の廢址あり

相傳ふ太田道灌の頃ハ國府臺の湊ニ舟を

泊す其後野州奥州常州徳州等の國々高瀬舟の便利をき

を用ゆるとありしより、乃徳へ運送するものとありとある。

永祿二年は田原北條家の分限帳に太田新六郎所領の中に尊西長島高

新

利根川（みづがは）源平盛衰記利根は作れり
旧名を太井江と云ふ東鑑等の書みえり

今武蔵國小幡を又北条五代記國府臺合戦の条下あはかめさく川といふと
 俗に東太郎と稱し或は文卷川又かひしうは河とも唱へたり

行徳とくを流なるる灰あふふの徳とく川がはとも号なづく水みづ源のたハ上かみ野の國くに利と根ね郡ぐん文ふみ殊こと

嶽の幽谷より發し高科川吾妻川烏川碓井川及び信州の

國郡より出る所の諸流合し武州幡羅郡に至り一河となる

又上州渡瀬川も利根不落金栗藪より分流し一
流北総小

入開宿木瓦等の地小傍く東流一鉦子より海小帰屯是を

利根川と号く坂東太郎と号す一流ハ武蔵下總の間に南へ流レ國府

臺の下を乃徳の方へ曲流し海水不帰せり
是を新利根川と稱す

按は信中君要は散位を刀初とあり西宮抄は大節ハ大夫を刀初と稱す
と云ふ公事根源云大節は刀初めと仰ふハ刀初ハ六位を云とあれと古ハ

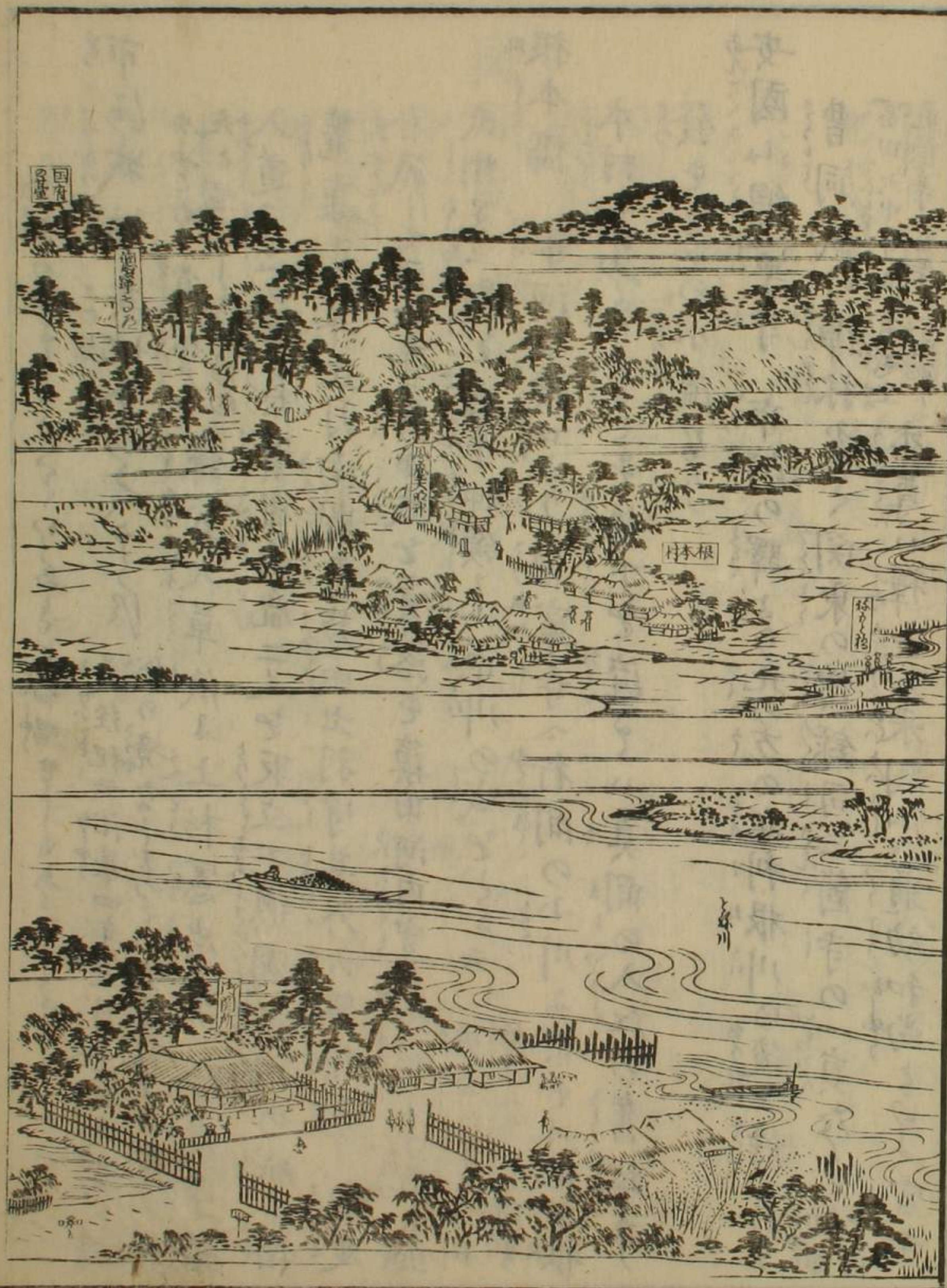
刀（は） 祢（ね） ともあふ五位（い） 以上（じょう） 中（なかつ） ころね（こ） 名目（な） なり又朝野（あ） 群（ぐん） 我（われ） 小檢（せう） 非違（ひ） 使廳（し） 下（した） 刀（は）
 祢職（ね） ともあふまゝ（ま） 補任（ほ） の（の） ちと（ち） 奉（ほう） たり李（り） 部王（ぶ） 記（き） 小百官（せう） 主典（しゅ） 以上（じょう） と刀（は） 祢（ね） と

新吏より見はるく長上の官せつて主典以上か長上の官なり
延喜祝詞は倭國の六所縣能刀祢男女亦至万感下署ある八百姓あしを

いふあふまうく螢のとのりまて唐劍往來は淀河尻の刀祢ともありそ
里長防令なとも刀祢といふもハ古今著聞集やうええり播州日岡明

神カミ毎歲トシトシ正月トキ初午ハツヌ日大頭オホカビといふを勤シメむ郷サト刀ヤ初ハツと称ナヅケへて旧家キウカ三十六人の
内うちあり是こゝを佐サカむ各オノオノ六位ロクイといふ明神ミヤコガミの供奉ホウブツ職シヨクより平日ヘイニチ射イリあり又五節イツセツの式シキ

ありて、悉く刀祢の役なり。至余山城の賀茂より、ひ鞍馬の華の天神の社職
等とも刀祢とより、後拾遺集、推神祇部、系梨の長能の公の御書、亦も里乃



市川渡
利根本橋
利根川

里俗ありてつゝつゝつゝとね唱せしもあるへり

市河城址 其地今あつて義経紀云治承四年九月十日武藏と下

入道了心の子息實胤自胤二人を取立下總國市川の城小楢

籠康正二年正月南圖書篠田出羽守其外大勢指遣一數度

合戦して同十九日終小城を責落を篠田河内守八閑宿より打て出

武州足立郡を過半押領し市川の城をとる云 猶前の弟六巻石

根本橋 市河の渡口より總寧寺へ行間の小川は架を此地を根

本村といふより号とを橋下を流るゝ真間の入江の舊跡より

發せし水の流れなり

安國山總寧寺 市河の驛より北の方の丘利根川の流は傍てあり

曹洞派の禪林あり閑東の僧録司三箇寺の一負なり 常陸

富田大寺武藏越生 本尊ハ釋迦如來開山ハ通幼和尚といふ當寺

往古ハ近江國あり天正三年乙亥北條氏政當國閑宿北

地小移をされと屢洪水の患あり寛文中竟は此地より

とあり惣門の内右ハ鹽竈六社明神の社あり陸奥の摸なり

とハ大田道灌手植樹と称するハ大門の通り列樹の中下馬の

石碑ハ相對して右の傍にあり又客殿の脇ハ梅の老樹あり是ハ

道灌親裁る所とて當寺より涼師道正 庵の解毒丸を出せり

國府臺 總寧寺の辺より真間の辺迄の岡をまゝかく称する

あへて 北条五代記ハ云古き文ハ國府臺小菅代嶋岱と云 按ハ鴻臺ハ武

州栗橋の西ふあり此地を云ふハ和名類聚抄ハ下総乃國

府ハ葛飾郡ふありと記せり依考する國府の近き辺ふあるハ

丘山あれハ國府臺といふ号たりハあへて 或人云下総國葛飾の府ハ

せしむるハ葛西昔ハ下総ハ属せり永正六年の宗長ハ 往古東土產中ハ下総國葛西

の府のうも半日ハあへてとあるハ今ハ津津土門 行東土產中ハ下総國葛西

とありとあるハ按ハ前ハ新利根川の条下ハ津津土門 行東土產中ハ下総國葛西

葛飾郡ハ大郡ありハ利根川と國府を中央小定めハ必東を葛東と呼ハ以西



其二
古戰場



國府基古戰場

總寧寺の境内に其舊跡なり文明十二年

七月北條の一揆臼井の城小指籠りたる項太田持資兵を發して

此地小陣城を取立件の一揆を攻落し程の究竟乃要害

なりこれ天文六年の或は又作御所足利左兵衛佐義明

兵を起し小田原を攻んとし事なると小渕て其廟あり

これ同年十月四日北条氏綱及び氏康小田原を進發し同五日

鴻の臺の陣を責る戦ひあり義明父子并舎弟基頼共討

死も又永祿七年の大田新六郎義兄弟の輩小田原小指き同苗

美濃守資正入道三樂斎及び里見安房守義弘等と此地小

これ小田原より討手として遠山丹波守同隼人佐をむかひ

む故小田兄弟相國相違して武州岩附へ落行なり然も北条

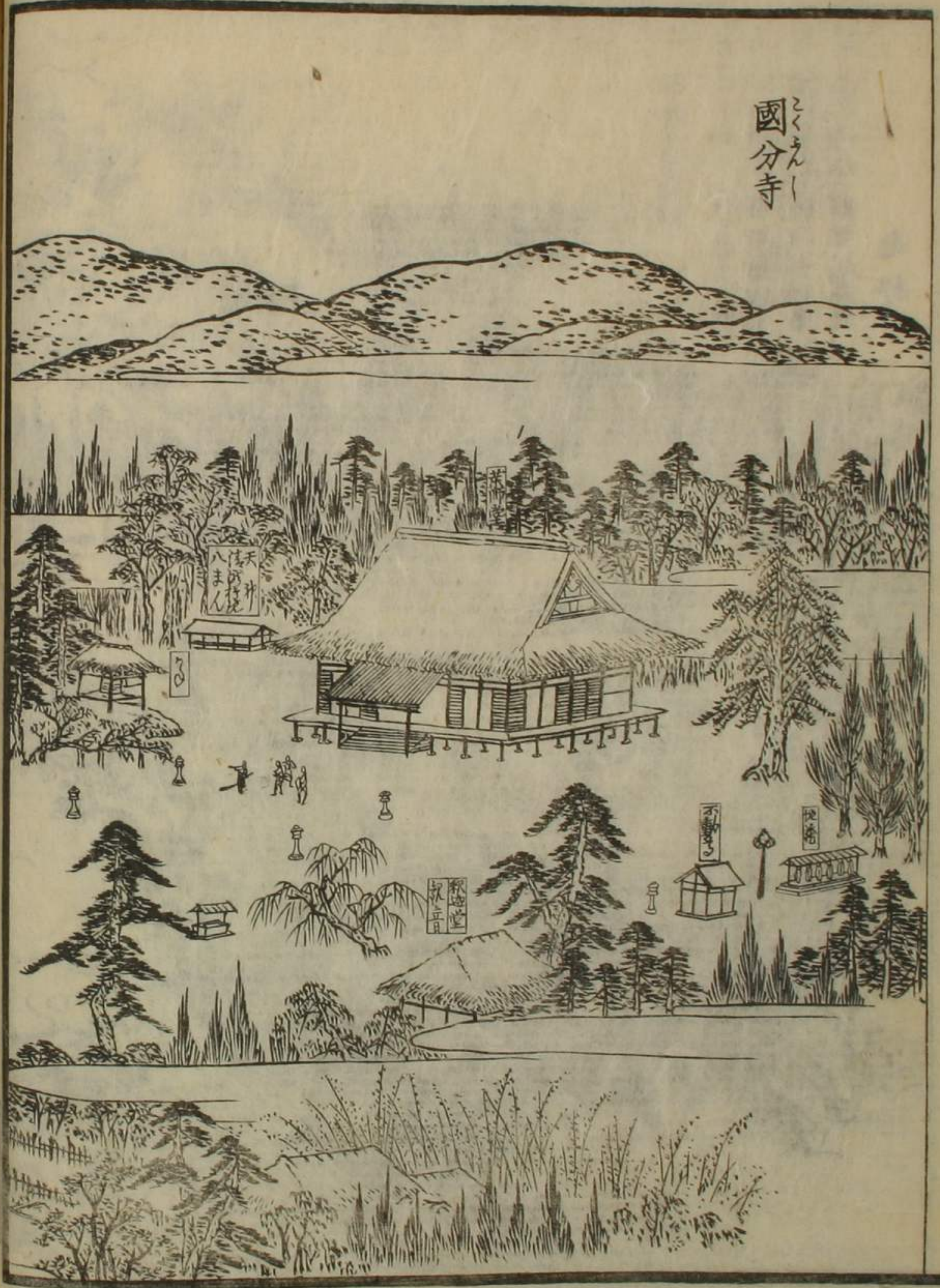
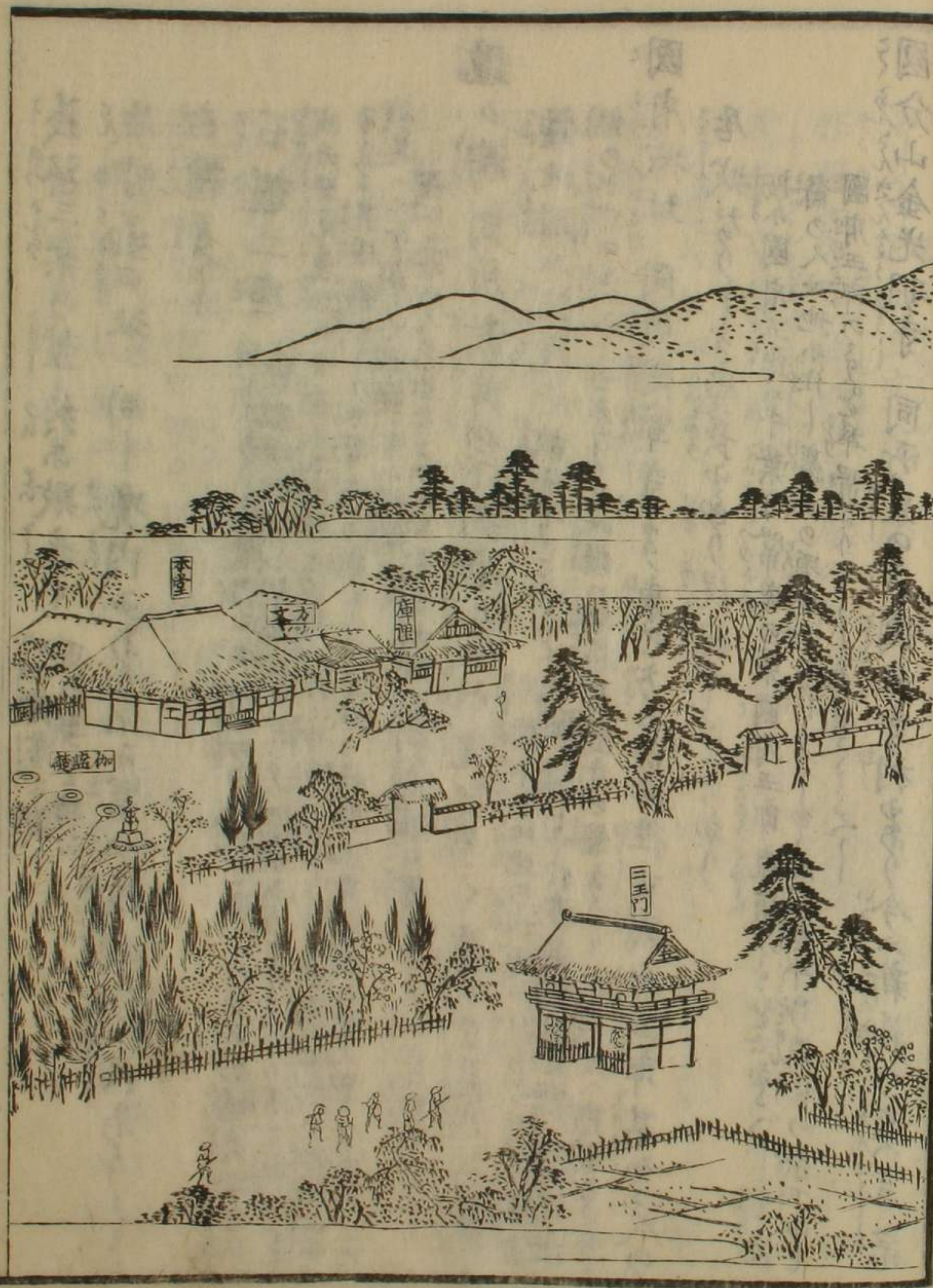
氏康父子小田原より馳向ひ同年正月七日八日大い戦ひ依る



國府臺の斷岸之圖



總寧寺晚眺
荒城千仞没蕭寺上方閑
山斷江帆出跡廻郊樹東
磬鐘餘鹿野戰代古鴻臺
落日斯時恨臨風起客哀
南郭



國分寺

義弘三樂の輩終に敗走せし
殿守墓旧址 同一境内にあり上小富士浅間の小祠あり

白檀多し

石櫃二座 同所あり寺僧傳云古墳二枚の中北より一を里見越前守忠弘

鐘淵 同所断岸の下利根川の水流を号く傳云里見氏乃陣

鐘此淵に沈没せ故に号とす此鐘ハ船橋慈雲寺の鐘あり

國府城址 同所徳寧寺より東の方より往古國府五郎某の人の

居城なり一慶長より没収せしとあり

國分山金光明寺 同所東の方國分寺村あり今ハ新義の真言宗

作勝士の十二神將ハ運慶の彫像なり

聖武天皇の御願より毎國に置る所の國分寺の一なり中興

山と宿天法印と号し本堂の額に金光明寺の四字を畫せハ智

積院僧正運淑の筆なり

樓門 樓上ハ古佛釈尊と安置を閑創

天王の像ハ上古の物なり其奇古なり其余古佛像多し

小田原北條家制札一通 興小千三月十四日遠山左衛門

古證文二通 一通ハ正三年乙酉二月三日とあり

古笈一 權大僧都觀學院慶長六年と彫あり

延喜式主稅式目 下總國公廨各四十万束國分寺

料五万束藥師寺料三万五千束文殊會料二千束

藥分料一万束下畧

鏡石

真間弘法寺
國分寺へ移方の
田畔石橋の傍小
溝の中あり生人云
此石根地中今す
其際をあらす
依要石とも号く
るとあり



當寺往古ハ伽藍魏々ありしともあやうこの星霜を経る大衰

廢し今ハ昔の万々を存せしもの當時の礎石と稱せしもの堂前ハ

あり今の寺境ハ大田道灌の頃の陣屋の旧跡ゆく古の寺境ハ乾の

方ありし今ハ畑とあり

内膳山 國分寺より東の方一丁計を隔てる丘を以て往古里見

義弘の舎弟正木内膳の陣営の地と云ふ

鏡石 弘法寺より國分寺へ行方の田畔石橋の際の水中にあり

此石根地中に入り其際をあらす故ハ一ハ要石とも号くとあり

土人此石橋ハ國府基にあり石棺の蓋なる由云傳ふ

持國坂 國分寺より真間へ行方の坂を以て古ハ此地ハ國分寺の

四天王の内持國天の堂舎あり故ハ号とせしなり

真間山弘法寺 國分寺の南にあり市河村日蓮大士弘法の地ハ

一ハ六門家と稱する所の其一員なり日頂上人を以て開祖とせし

入重
玄門
倒修
九事
の意
を
そり
人ぞ
わし
とん
せ
後ふ



我身ハ
りん
まの
松
日蓮

真間
弘法寺



其二



本國院日蓮上人ハ六老僧の中にて伊豫阿闍梨と稱せ富本常忍の子なり文永四年
 丁卯日蓮上人ハ就く得度を得安永五年壬午上足の第五とある日蓮上人の滅後守塔居士
 と營庵と本國院と号し土人ハ山本坊と稱せ正安元年己亥父常忍寂のの後哀とつ
 くく八月十二日を去り終ひていふなり依示寂の年月其終焉の地をあるなり
 本堂を釋尊の像を安んず富本常忍嘗
 造り當寺の奉安を日蓮上人日頂師を祖師堂ハ其右小並み内ハ宗祖上人の
 像と置此像ハ日法上人の作なり支院十餘宇各證道并下に
 列せ大門ハ松の列樹なり六丁程あり
 楓樹 秋庭堂の前ハあり今ハ枯株となり其形を存せざるなりハハハハ四五丈ハ
 遍覽亭 古丈の構つちあり額ハ遍覽亭と題せ黃檗千呆和尚の筆跡
 江戸の大城甲相の群山雲のそと霞の横たふ又さうさハ房総の海水遠く聞け
 奥ハ千里の風光を貯へり
 樓門 石礎の上ハ簷の左右の金剛力士ハ工運慶の作なりとあり全髹黒色ハ
 當寺往古ハ真言瑜珈の古刹なり日蓮大士此地ハ遊化の頃
 寺僧大ハ宗意を論じ竟ハ大士の化導ニ帰依し宗風を改
 轉せりとあり
 或人云西新井邑總持寺ハ安永の弘法大師の像ハ
 當寺改宗の頃かこふ述しまわくせいと云日統撰曰了性

真間の弘法寺に住す或曰日常と号す屈を請ふ逃る日常衆徒を化す等因に本此の道場と云ふ又先徳記を考ふ則東河田谷天谷宗の中より性と云あり本文の宗祖上人と号せし住侶の名を住とせしと云ふ此下性あり
當寺什宝多き中をも宗祖上人及び諸徒の真筆の曼荼羅消息の類ひ數通あり悉く奉ふ不違每歲九月九日より十八日迄法華經千部讀誦十月十三日ハ宗祖上人の忌日なり御影供と修行せり近在の道俗群衆を
真間浦 同弘法寺の前の水田の地をも勝鹿の浦といふ
此所のうと云ふ一土人云昔ハ真間の崖下も浪打寄たりと云ふあり所謂大洲ハ初ハ洲あり所あり立野といふ芦を刈りて陸地とあり一あり芦畔といふと萱野といふ水田を開墾せしなりと云ふ
万葉集

可豆思加之麻萬能宇良未乎許具布禰能布奈
妣等佐和久奈美多都良思母

夫木抄
俊賴

續後撰集
かづのの海間の浦はうちけふそめ一人のあきまゐも 道隆

真間濱 地ねーあーとつあー

夫木抄

真間入江 是も同一辺なりこれとも今ハ耕田とあり又ハ民家林藪ふ沿革して古は違へ

万葉集

勝牡鹿乃真々乃入江爾打靡玉藻荇兼手兒名

志所念

續十載

あれーかまの入江をのて朽な神のまーともんよ 爲教

夫木抄

真間於須比 仙覺律師の萬葉集抄云於須比かといふをひあり山のふもとに於思敬爾とあり又又阿闍梨の成業代面記にまかまひハ駿河能宇美ありハ浪とありハ意ありとありハ磯辺といふあり

可^カ豆^ツ思^シ賀^カ能^ノ麻^マ萬^マ能^ノ手^テ兒^コ奈^ナ家^カ安^ア里^リ之^シ可^カ婆^ハ麻^マ未^マ
乃^ノ於^オ須^ス比^ヒ爾^ニ奈^ナ美^ミ毛^モ登^ト杼^シ呂^ロ爾^ニ

弘法寺の大門石階の下南の方の小川に架を所乃

あふ川の橋の中あふ小橋をさしてゆけり
いふあふとさふあふとさふあふ

或人^{あるひと}の古^{ふる}へハ兩岸^{ふたうし}より校^いをめて
中梁^{なかつら}を打ちけし故^{ゆゑ}に継^{つぎ}をてとハ

安能於登世受由可牟古馬母我可都思加乃麻

末乃都藝波志夜麻受可欲波牟

猪鹿や昔のまに
猪鹿をいふれず
さうさうさう
う那

五月五日、越前、波戸川、月一、如く月一、うきうき、其間の終極

雅經

かゝるはまの海風吹あがり夕波 報よと此つきを

朝村

山城の淀といふあり

入重玄門倒修凡事の意を

とふ人な後一をえとせし御ふあふ

日蓮

同所ついで継ついで橋しほより東ひがしの方かた百ひゃく歩ふをあり手て見こ

名^なの墓^{むら}の跡^{あと}なりと云^いふ後^{こう}世^{せい}祠^{わらう}を営^{いとな}みてこれ^こを奉^{ほう}じ手^て児^こ名^な明^み神^{かみ}

と号に婦人安産を禱り小兒疱瘡を患ふ類ひ立願て其

奇特を得とゞり祭日ハ九月九日あり
（云）文龜元年辛酉九月九日此弘法寺の中興第七世日與上人の

靈告ありあつてふ崇めなりととり春臺文集継稿に小手見名のうを載うりととりとを
其説里諺ゆふのうとく證とせふ足らず

清輔奥儀抄云 是八昔下総國勝鹿真間野の井の水汲下女

なりあき^き麻衣^きを着て^きき^き水^{みづ}を汲^{くみ}其容貌^{そのようばう}妙^{たふ}なり

貴女ハ千倍ちひさせり望月もちづきの如ごとく花はなの咲さく如ごとく立たつを見みえ人々ひとら

相競ふる夏の虫の火入る如く湊入の舩のめくなりこふ女思ひ

あつゝ一生のそとを存ぞんし其身そのみを湊みなふ投な中畧

又か所へ此傳のてとふともよめり 真間まゐ乃入江いりえ 真間まゐ此

継つぎ摺すり真間まゐの浦うら真間まゐ井い真間まゐの野のなとよめるこれ世この世あり

云

過勝鹿真間娘子墓時作歌

山部宿禰赤人

古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻
問為家武勝壯鹿乃真間之手兒名之奧擲乎此
間登波聞抒真木葉哉茂有良武松之根也遠久
寸言耳毛名耳毛吾者不所忘

反歌

吾毛見都人爾毛將告勝壯鹿之間間能手兒名
之奧津城處

詠勝鹿真間娘子歌

高橋連蟲麻呂

鷄鳴吾妻乃國爾古昔爾有家留事登至今不絕
言來勝壯鹿乃真間乃手兒奈我麻衣爾青衿着
直佐麻乎裳者織服而髮谷母搔者不梳履乎谷
不看雖行錦綾之中丹暴有齋兒毛妹爾將及哉

望月之滿有面輪二如花咲而立有者夏蟲乃入

火之如水門入爾舩已具如歸香具禮人乃言時

幾時毛不生物乎何為跡歟身乎田名知而浪音

乃驟湊之奧津城爾妹之卧勢流遠代爾有家類

事乎昨日霜將見我其登毛所念可聞

反歌

勝壯鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒
名之所思

下總國相聞往來歌

作者未詳

可都思可能麻末能手兒奈乎麻許登可聞和禮
爾余須等布麻末乃氏胡奈乎
真間井 同所北の山際鈴木院とのみ草庵の傍あり手兒奈
汲る井ありと云傳の中古此井より靈龜出現せし故に龜井

梨園
真間より八幡へ
杉道の間
あり二月乃
花盛ハ雪を
欺ハ似
李太白の詩
小梨花白雪
香と賦
銘あり



ともいなり
此鈴木院と云ハ北条家の臣の造立故ハ鈴木と号ハ又此庵の傍ハ其祖先鈴木近江守
石塔ありこれ同修理と云ハ造立ハ
横小寛文八年戊申相州鎌倉鶴岡修造の時の工面と鈴木修理長常と
然時ハ番匠の家ハ人故ハ鶴岡修造ハかく載されとも又別の人ハゆゆ考ヘ
万葉集
勝牡鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒
名之所思

葛飾八幡宮 真間より一里あり東の方ハ幡村あり
常陸平房翁の海道ゆき
驛なり鳥居ハ別當ハ天台宗やまハ幡山法漸寺と号ハ本地堂
道あり
や々阿弥陀如来を安置 二王門ハ表の左右ハ金剛密迹乃
像裏ハ多聞大黒の二天を置
神前右の脇ハ銀杏の大樹
あり神木とす
此樹のうしろの中ハ常ハ小蛇あり毎年八月十五日祭礼ハ音樂
古鐘一口 寛政年間枯木の根を穿テ是を掘リ其文三尺七寸あり竜頭の
横小應永ハ鐘の銘ハ永の元亨元年より凡九十有余年後の年号あり
埋め多時其年号月日を刻



八幡不知林
 八幡宮

奉治鑄銅鐘
大日本國東州下總第一鎮守葛飾八幡是大菩薩
傳聞寬平宇多天皇勅願社壇建久以來右大將軍
崇敬殊勝天長地久前橫巨海後連遠村京虫性動
鳧鐘曉聲人戰眠覓金塔夜響永除煩惱能證菩提
元亨元年辛酉十二月十七日

筒粥神事 毎歲正月十五日の朝此神あり 放生會 八月十五日は修行す
又同日津宮といふあり夕七時頃當社の社人等集り華表の前は櫓のやく長き
掛の白布を巻くを建上の方より其白布を捲ひ合せく足をかき代々念願
あふ人身経より伴の櫓の上へ登り四方を廻り社の方を拜し下る此行は
相州日向某師よりありくかき登り其趣相似たり又其津宮社の
下は樂屋とまうけ祓夷帰社よりありは獅子舞大鳥の形を救ひく此樂屋より
笛太鼓の合せく舞ありあり同十四日より十八日迄の間生姜の市あり故に土俗生姜
祭と唱ふマチハ祭の俗語なり

當社ハ宇多天皇の勅願やゝ寛平年間石清水正八幡宮を勸
請せし宮居なり遙の後建久ふ至り鎌倉將軍頼朝卿再び
傾の社壇を修營ありしより封域廣く々々壯麗なり又星

二整いまま今ハ老樹らうじゆ鬱蒼いつそうとくく上久じやうきうと神垣かみかきとあまの星
 按あはせ小當社せうたうしゃハ國くに分ぶん寺てら小同せうどうく一國いつくに一宮いちみやうの八幡宮はつぱんぐうより往むかひ古府中ふるふちう置おれ
 どの題だいはなる

幅不知森 同所街道の右は傍々一ツの深林あり方二十歩よるこ
す往古八幡宮鎮座の地なりと云傳ふ即森の中ふ石の小祠あり里老
云人謬る此中小入時ハ必神の祟ありとて是を禁む故小垣を繞

らしてありて
或云わう平親王將門平貞盛う矢あより秀郷を討れ後
六人の近臣と称する輩其首級を慕ひ此地に至りて頃此森の中は
入て働うを終は土偶人と頭れより其後雷雨は破壊せより此地を踏者あは
必たりありとて大小驚怖せりとて又或人此森の面帯はよりくハ幡の地は
して森の地よりハ行徳の持分なりと此故ハ幡村の中に入會とて他の村の
地あるハ幡のハ幡ありとハ字せしとてハ幡村

因に披讀し、幡庄本妙寺法華寺弘法寺三所寺務職云々同在曹谷
證文下、國八幡庄本妙寺法華寺弘法寺三所寺務職云々同在曹谷
郷田畠在家云々かくの如く記せり證と云々一、又あれば真間のあきり曹谷

谷妙見尊 曾谷村長谷山安國寺小安置せり 當國千葉寺妙
見尊みんそんと同本どうほんやゝ其末本そのまつほんを以もつて彫刻てうこくせといふ 當寺とうじ境内けいんに王おう
義ぎ之宮のみやあり華表けいひょうの額うくは晉王公廟しんのおうこうのびやうとあり烏石うせき葛辰くわしんのをあそ

傍る石碑を建つ何の謂れなるを知らず

高石明神社 八幡より東の方佐倉街道鬼越村深町の入口道より

左の岡より別當八日蓮宗より泰福寺と号に祭礼ハ九月

九日なり土人傳云當社ハ里見安房守義弘の弟南總大多木

城主正木内膳見時徳の墳墓なりと云り

神體ハ劍を帶せ馬軍神の像なりとの

注進の状ハ幡庄内より高石神村の地を寄附せり又同年二月同龍貞時

安房須明神社 同所中山の北池田とのあり北の岡より傳云

里見越前守忠弘の息男里見長九郎弘次の墓なりと云り

今淡島明神と云

北条五代記ハ里見長九郎弘次生年十五歳初陣なり

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

落し既前を取むとせりと容貌美麗や花のやき少年なりと云ふ

正中山本妙法華經寺 船橋街道の左側よりあり

日蓮大士最初轉法輪の道場より一本寺なり

開山ハ日常上人

鎌倉大草紙云千葉介貞胤父の宗胤三井寺にて討死
せし後北國盛近六宮方より新田義貞の弟供よりいふと

祖師堂 日蓮上人の像を安んず
日法師の額 祖師堂
太虚庵光悦筆

道を此所の大田乗明の宅地なり
乘明日常上人の教と受自の宅地と轉して佛宇に

輪法華説法の道場なり
常思へず
額
光明法花經寺
光悦筆
堂内外陣の家帝
み掲ぐ此堂の軒小
其文云く

十月廿二日

日蓮判

進上
富博入道ちかひろ

眞書ハ宝庫ほうこ小収む世不銭せふせん四勢しせいとて造つくと云いはつとの曼まんなり
鬼子母神堂きしもじんどう同左小並此鬼子母神堂ハ鎌倉の某の堂ありと移うつせりとゆふ
轉寫鬼子母神の像ハ宗祖大士の作やと往古大士常思建立けんたつせ

毎月十七日の夜、巡在より道俗衆を誘ひ、終藏（しうざう）の儀を行はせり。終藏（しうざう）とは、社前（しやぜん）の常習（じやうしゆく）の儀（ぎ）なり。

能くも故に此樹の下は幾回も来りて哭てを帰られり。故に此号ありと

文院三十六字
今破廢せしものあり
堂は十六字存せり
二王門
額 正中山
日等上人筆

う
ち

う
ち

其の院ゐん方丈ほうじやうの構かまどの外ぐわい右の方みぎのほうの小路こうじを入いれ三丁さんていをくぐり東北とうほくの方ほうにあり文應元年ぶんおうげん

蓮山法苑寺の旧跡なり。蓮上人傳ふ屋敷の後ふまそり百間をくまひ堤を築
中ふはこゝよりく土をうさひ堂をあつひ聖人の所まうけあを立られりとあふこれ

二世の神代卷上人の作の宗祖大士の影像をうへてあるとのり
女置せし日法上人の作の宗祖大士の影像をうへてあるとのり
同所道を聞て左の方より石塔の上は草堂をいふと

因懷國富城の産中々兼久二年庚辰を以て生る

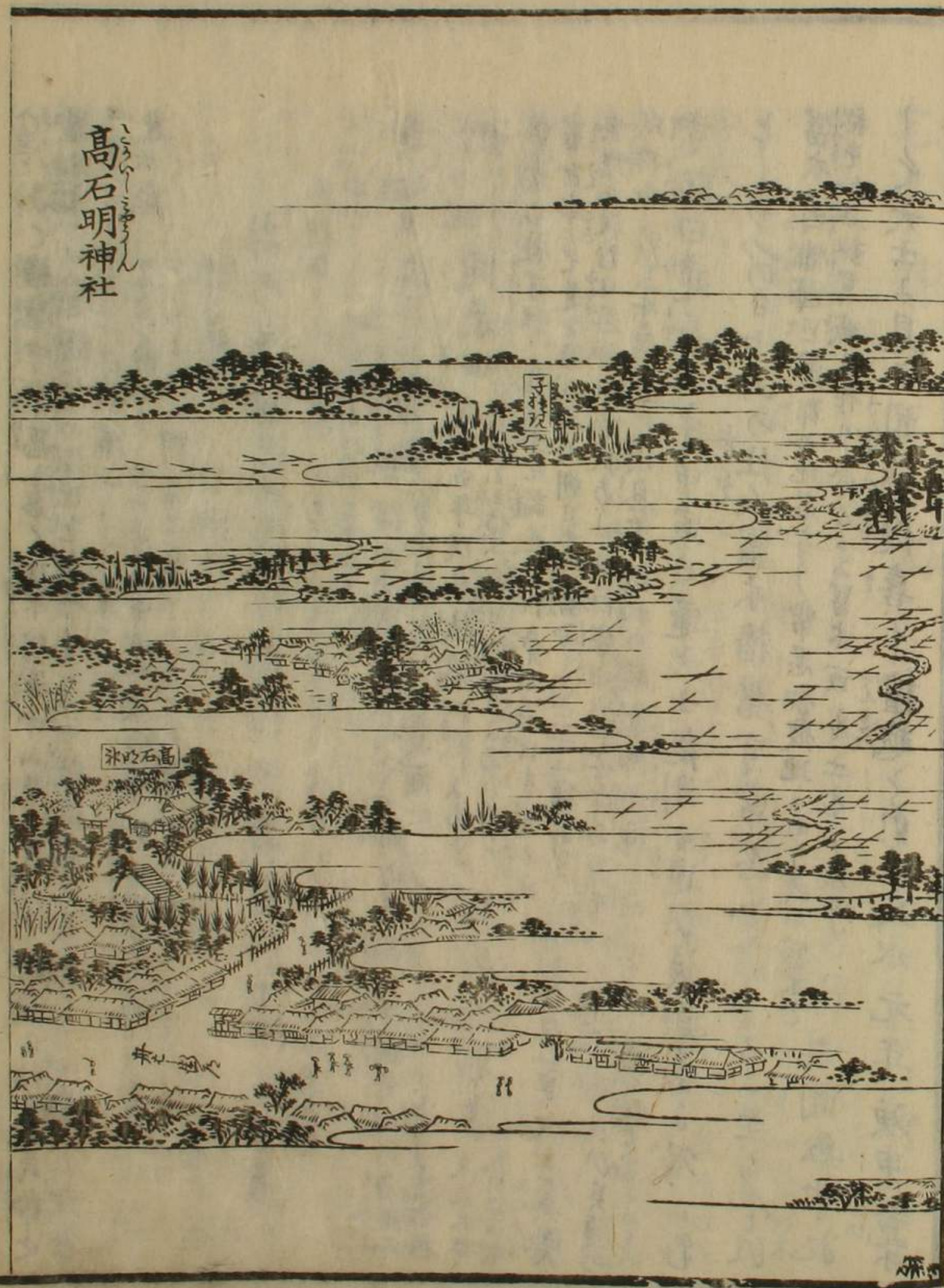
東土産
杉の
葉や
あじの
後乃
教
月
宗長



妙法華經寺



高石明神社



其二



道長播磨守常忍と名く後下徳國中山邑は後住鎌倉は土民稱く
富本因播磨守常忍の法化をたて大士の誠後竟小華添して日常と改む
正安元年三月二十日八十歳なり化す
東土産 其の法を中山の法華堂本師寺に一者
あらはし一州をありしと云ふ

杉のまやあゝははのあまの月 宗長

寺寶立正安國論 諸山小藏に在る四部なり洛の中國寺甲の身延山

大士の親 同来由 文永五年戊辰法鑑日蓮のあまの月 稟推出家書 文永三年

常忍台後了性と法義と論じ性竟小屈伏を富木氏 高祖日蓮大士真骨

書を奉て是を告同十月朔日の返書や二十二通あり 武持ありひふ子葉家の消息寄附状の類靈佛天神の徳を多く悲く記す

寺記曰建長六年甲寅日蓮大士徳州小遊ひ後鎌倉に歸らむ

と一あの日中山の住人富本播磨守常忍も又かゝるに至らん

富本因播磨守常忍の地名なり常忍初彼地はあり故に富本と

稱む和名抄置城は作り今こゝ富本或は土木とす 其間船中に

しく大士は見え聞法隨喜一檀越とれる文永元年庚申竟小

宅地を轉く一字を營み大士をてこふ居らる此時一百日

の間大い説法あり又大士自親一尊四菩薩の像を彫刻あり

かゝる安置一法華堂と號けり 中山記に云く宝庫に一尊四大士の木

菩薩形あり皆大士の手刻と云く此法華堂といふ 像二刻十軀あり其一ハ佛形其一ハ

大士最初轉法輪の道場なり今奥の院と稱す 時小曾谷教信 教信姓を

左衛門と稱す法名ハ法蓮日禮と唱ふ當國曾谷小住を 秋本太郎兵衛 秋本

後宅地をあるて梵刹と一曾谷山法蓮寺と号く 白井の人なり子孫小至り其地一字を

創建く白井山秋本寺と号く 及ひ太田兼明等来く檀越と

なる 兼明ハ五郎左衛門尉と稱す當國中山民部少輔康連の子なり曾富木氏の

後中老僧日高尊師父兼明卒まゝの後日蓮大士の命を應

日常上人の教を受其家を改く精舎と一正中山本妙寺と號を

今の正中山 亦先の法華堂を合て一寺と一正中山本妙法華經寺

と号す 則日常上人を閑山と稱し日高師を第二世とす然小佛

心院日現師 當山 台命ふより寺法を更めより己降

京撰より輪番して當山の貫主とあれ毎三年三月十三日より同

十九日に至るの間法華經千部讀誦七月十五日相撰奥村を十月
十三日八日蓮大士の忌辰なるより大法會を設く近國の道俗群衆
一々大に賑へり

若宮八幡宮 奥の院の地より一丁をかり東の方叢林の中より富木

氏の鎮守の神なりとの事 中山什物の内正和三年甲寅四月二十一日高師より計
地等より中畧若宮御堂中山坊若宮別當職ありひの彼岸田谷中下畧云々又同什
物正安三年日高師より添られしより若宮持佛堂の本寺と稱せし首題の御幅あり
然れ其頃ハ別當職を別附置て崇敬尤厚なりとあり

妙正池 中山より北の方二十町を隔て千束村とあり

傳云文應元年庚申日蓮大士 年三 富木常忍の假
所の法華堂に入あり一百日の間妙法論を講し群生を教導
あり頃此所の池靈婦女と化し日々彼地に至りて大士の説法を
聴受し信心衆は越えり一時彼婦女来り大士に向て云く妾今
尊者の法施を冠り一乘の真因を得んと願くハ大士手書の

本意及び自の法号を賜ふんを乞ふ大士乃曼荼羅を授け
又妙正といふ法号を授け婦女喜んで去人怪むて跡は随ひ至
る此池辺より其婦女の姿を見失ふ然は其が忽然とて
傍の櫻樹の枝にかりてあり衆人奇とせり於て此池の靈なる
事を知り妙正と号け後一社は奉せり
其婦女往還の道を曼荼羅
羅小路と字に或は蛇

妙正大明神祠 同所あり或は蛇神とも稱せり 蛇瘡を患ふ者祈られん
念て験ありと云 日蓮

葛飾明神社 中山より東の方栗原本郷の街道より左へ四町
ちうま入る叢林の中より葛飾の惣社と稱せれとも祭神詳な

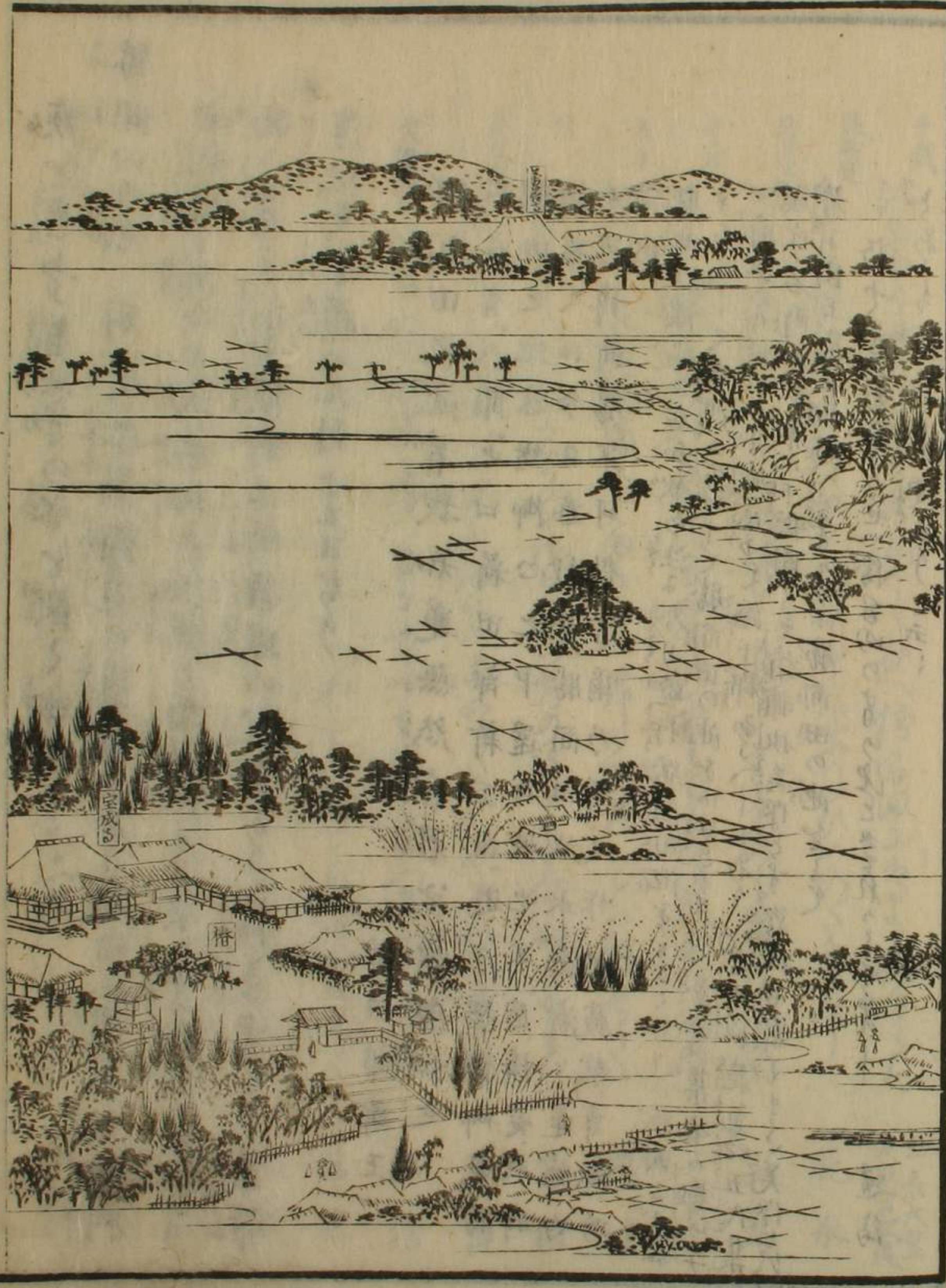
らそ同所真言宗萬善寺別當より祭禮ハ九月十五日あり社あり
東の方此林間稻荷の小祠の傍は葛の井と稱せり井あり當社此
井手洗といふ土人相傳へる此井の水脈龍宮界に通と云瘧

葛飾明神社

葛の井
萬善寺

栗原寶成寺

あき寺の庭前
椿の大樹あり
さくさく
やぐ校ろ
あつれ四方へ
四間ありあり
て壯觀あり



勝間田池
栗原本郷邑の
地あり故よ
本郷の溜池と
号く

万葉集

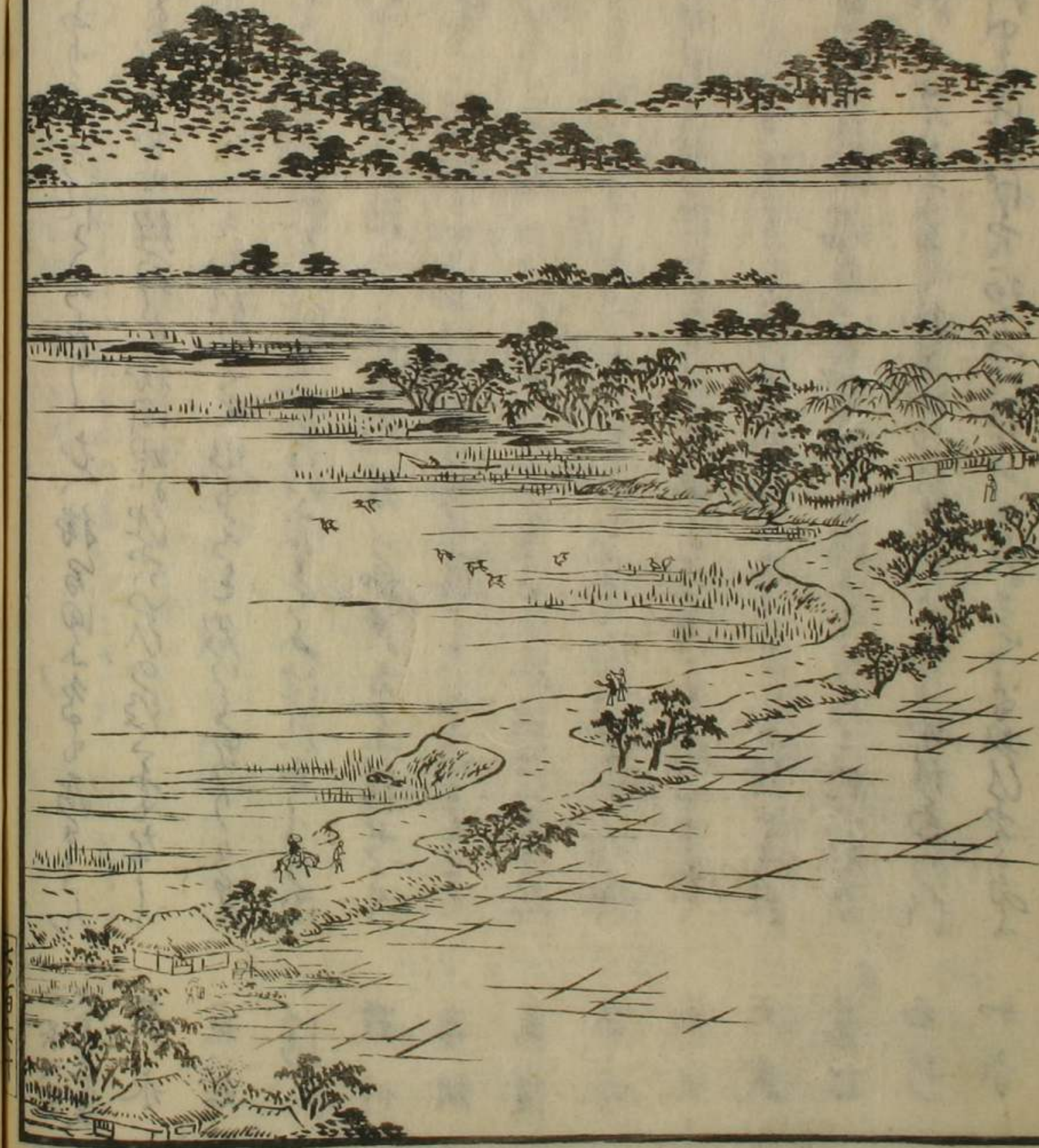
かみすこれ

にき

われ

ちちす

あし



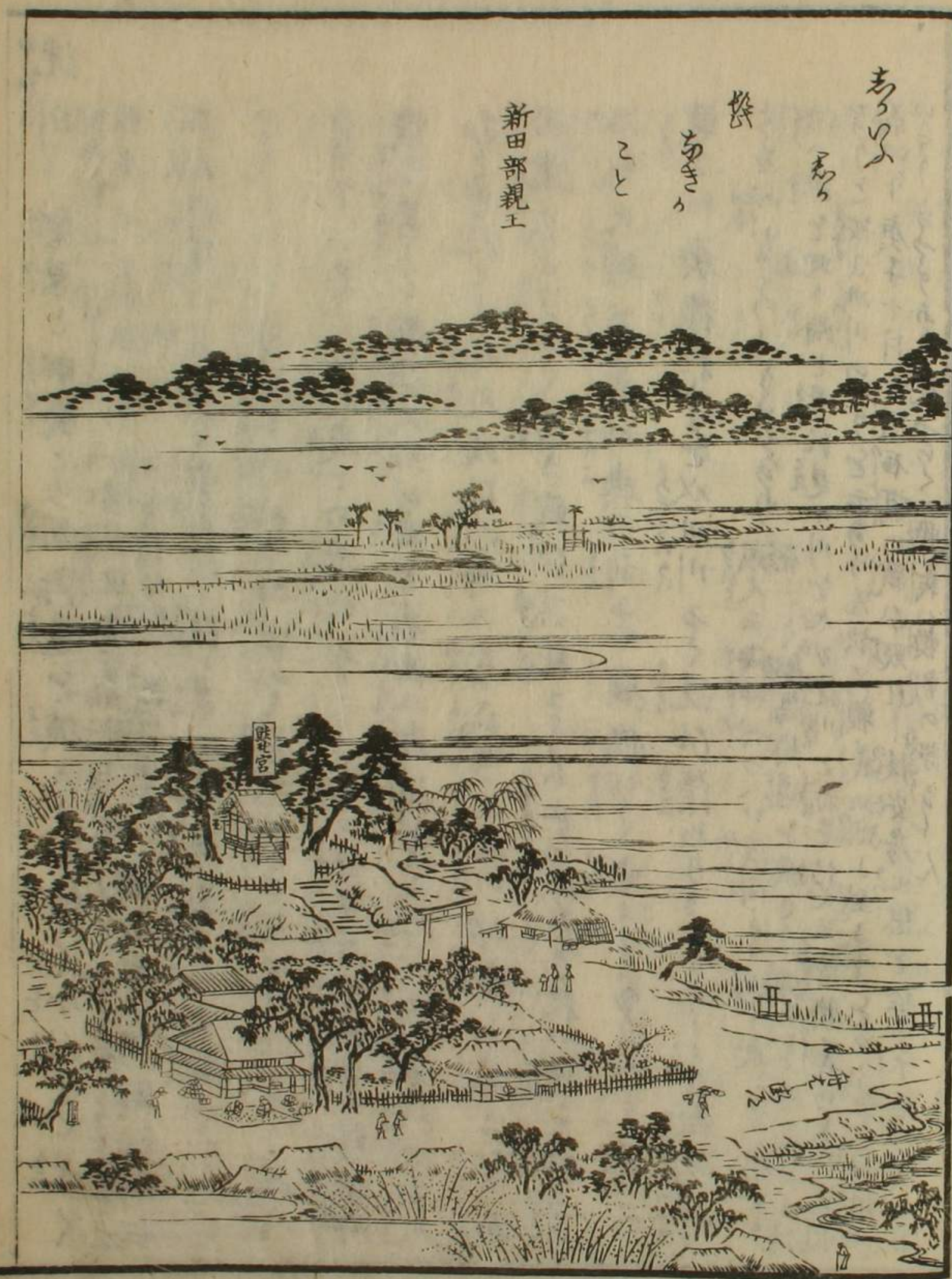
あつひ

あき

あき

こと

新田部親王



洗川

栗原と船橋との間街道を横きりて流る小川を号く

血洗川とも称せり千葉満胤意富日神社へ神傳云右大將頼朝卿征

夷大將軍の宣旨を蒙られ後其威勢實は草木も靡くを

なりされと意富日神社の神官の累代天子勅宣ありて武門

幕下はあはれを度々の催促ありて是は應せ給ふ頼朝卿

憤り甚しく船橋六郷の地を葛西三郎清重に給ふ清重此地に入

むとせしめし神人及び六郷の農民等三神の神輿を前より昇居

西栗原より文へる防ぎ戦ひ其乱さる止らざりて終に神官

治部太補基義神輿の前より腹掻切て空しくありぬ時乃

戦は神輿穢れしを以此川に洗ひ清めしりて血洗川

とを呼ばりしとあり或人云海神村の入口浅間より東の方の山より

流ハ源を蛇の淵と号し是は小川を太刀洗川と稱せし云源頼義の太刀洗

なりと按は此川のつらと云ふ人又頼義此地に至るを云ふ頼朝治

阿須波明神祠

西海神村にあり禪宗大覚院奉祀を娑竭羅

龍王を祀ると云故は此地を海神耕田と道路とを隔て海江に向く

華表を建る九月日を祭祀の辰とす此日芋を食まを旧例とす

故ふ土人芋祭と云ふはせり當社に小柴をとりあり旅人にとり

長途の安全を祈りまゐる云々奇林良材は下総國阿取波宮とまゝは社ハ

神の誓ひあり小柴を立く祈りありと云云

萬葉集 爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之阿例波

伊波々牟加倍理久麻豆爾

新千載 名寄 今もあはれかへさめやいふあすの宮ふも葉とひき 定為

いふれとあはれの歌をへる人々をけしむ葉とひき

石芋 當社の入口より里邊より往古弘法大師東國化度の時日くれは及び

ありて是を許しと云ふや大師邪見の輩を教導めん方便とてその家の

傍の芋を加持して石とれあはれと云ふ其芋四時とも不腐れすて年々生



意富神社初鎮座地

船橋驛舎の入口海神村御代川氏某

地あり日本武尊此海上中々八咫鏡を得る伊勢太神宮

の正體と鎮座あり旧跡なりとの今意富神社の地此

昔ハ河川ハ作ハ水の深キを以テ訓義ヤク日本武尊を導マセ此海

邊ニあり神鏡を得セアモルセリとの後裔あり其子孫今猶連綿

夏見厨海神村の北の方あり今東夏見西夏見と唱へ二ふ

古伊勢神の神領あり意富神社の神主是を務たり

神鳳叙曰伊勢太神宮造替遷宮事曰食米慶々

二所太神宮御領諸國神戸御厨御蘭神田名田

等合下總國夏見御厨上分布三十段口入三十段一名船

橋二百丁神鳳抄其餘下總國あり相馬遠山形葛西猿俣萱田神保等共ニ合セテ五箇

所トイフ意富神社傳より万葉集

爾保村里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能

意富神社
舊地



可奈之伎乎刀爾多氏米也母

かくよめハ古葛飾の早稲をもちて神は新嘗なり一斗をうつふありと此和奇の
 ろうろを此のちの早稲をもちて神は新嘗なり一斗をうつふありと此和奇の
 忌まふくろくをもちて神は新嘗なり一斗をうつふありと此和奇の
 とやめてふあめをもちて神は新嘗なり一斗をうつふありと此和奇の

船橋 驛舎なり海神村及び九日市場村五日市場村等の三邑の

總名わく古の神領の地なり舊名を湊郷と云ふと相傳往古

日本武東征の時此地に至りあひ海上より一面の神鏡をぬ

あへり其地を海神依て其地は神鏡を遷しちる然る頃ハ水無

月あり早お續官軍大なる尊其神あり一ハ驗あり二三

日の間大雨降續官軍勢ひをゆる竟は凶徒を亡しり其後湊

郷の辺洪水あり神鏡の宮所へ移通へき便なり一ハ船城

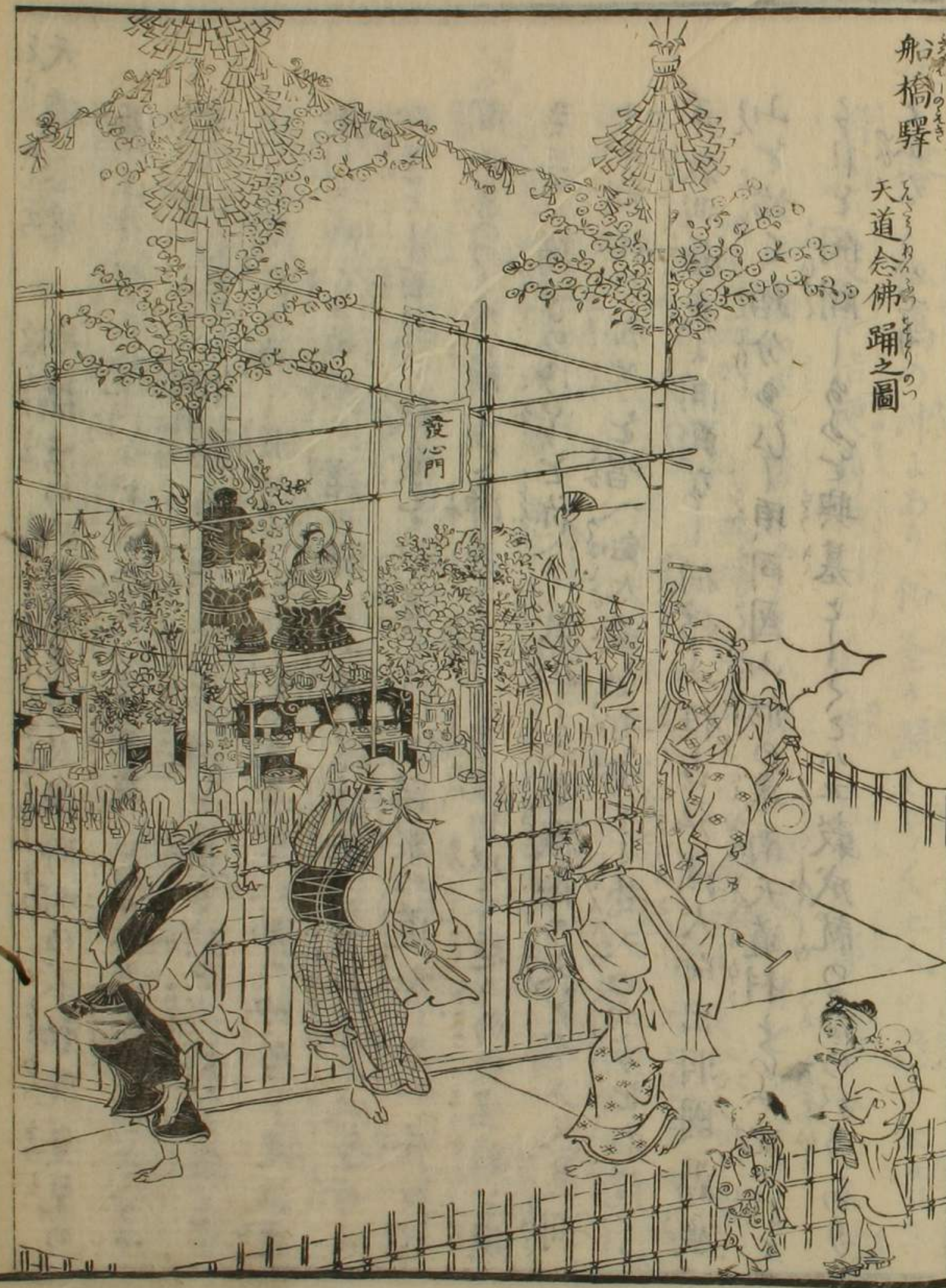
浮りて橋とありあより此地名發るといふ東鑑曰文治二年丙午三月十日

多つきあり關東津知行の國々の内乃貢未済の庄々家司等の注文を召下

催促をかしめしき由とある条下下總國船橋津厨院津領と云く

船橋驛

天道念佛踊之圖



天道念佛

船橋宮の内の東光寺及漁師町の不動院夏見の
薬王寺等の境内に於て執りせり毎歳二月十六日は始り同十八日
終る昔ハ一七日の間執り堂前小土を以壇を築き竹を以柱と儼多
これを梵天と稱し其四方は四の門を開き四十八柄の神幣を建注連
を引く等皆悉く諸の佛天を表し内ハ大日如來の像を安て
平素と一口味の飲食を供養せり詰衆の道俗ハ各一昼夜比
間六度つ垢離して淨衣を着し白布を以て造る所の宝冠を頂
き三寶諸尊の法号を稱へて敬礼し六根懺悔の文を唱ふ又其間
中々弥陀の称号を唱へ鉦太鼓を打鳴し梵天の四方を右繞せり
又救回昼夜は間断なく相傳ふ往古弘法大師出羽國湯殿
山を始て踏分ち一頃同國山形の東南天道村と云ふ地に於て
これを開闢し之を興基と云ふこハ五穀成就の爲のなりと云
と云なくハせり

遠く零

船橋の沖にあり俗釜淵と号く土人の謠は云昔平
将門の愛妾桔梗前將門亡びて後ハ流石は都へ歸らむも物
うく船橋の里に暫しやと云ふ終ハ此海底に身を沈みしと
なり此海は幸あつて其魚の諸魚と名膳料と云ふ江戸へなる昔
大樹此地に至りし頃此の海に魚と名膳料と云ふ江戸へなる昔
神宮へも指しあり故に此の海に魚と名膳料と云ふ江戸へなる昔
社説は此海は幸あつて其魚の諸魚と名膳料と云ふ江戸へなる昔
あり鯛の腹は此の形ありと云ふ船橋宮神廟の傍に海は映し自然に魚を産
あり実ハ神徳四海に溢れ海神も感應ありと云ふと云
大峯山慈雲寺 同所二丁あり北の方新田にあり五山派の禪窟
あり鎌倉建長寺第二世佛光禪師開基の精舎あり本寺
釋迦如來ハ行基大士の作耶士ハ文殊普賢等なり昔ハ盛大の
寺院あり一ハ永禄年間里見義弘兵火に罹りて灰燼と爲る
又此時當寺の鯨鐘をも國府臺の陣へ棄れしと謬る利根
川へ沈みしと云ふ今其處を字し鐘淵と云ふ國府臺の条
宝曆中徳藏と云ふ禪僧
再ハ鐘を造ると云ふ

意富日神社

意富日古八日と比ふ作天正以來

船橋驛上徳海道

成田海道との岐道五日市場村に宮居す世に船橋太神宮と稱し延喜式内の清神より關東一之宮と崇む神官大宮司

富氏奉祀せり

當社大宮司富氏の始祖は景行天皇第四の皇子五百城入彦尊あり天皇より賜はる下向なり初に東國八千八村の縣主惠當宮の神官を司りて其後基継の時又嗣あきふ依り千葉滿胤の子基胤を養子とす此時日月を以て家の紋とせし天正十九年辛卯大神君當社に泰指の頃神官富氏御役の軍配團扇を根引の若松と添て献り其後上意より若松は軍配團扇を家の紋とす隔年三月年始より旧例に任せ清夜大麻は根引の若松と添て献上しなり登城を永規とす

本殿祭神

天照皇太神宮

二座相殿

左八幡太神宮
右春日大明神

延喜式神名記

下總國葛飾郡二座

三茂侶神

貞觀五年五月二十六日戊子授下

又同書曰

五位下意富比正五位下授同神正五

船橋
意富日神社





四位下

長一尺五寸ありなり来由ありと云ふ
 重き哉あつちやうありてろふと云ふ

長一尺五寸五分、ひり日蓮大士
奉納ありといふ

木劍

是も同一大士の納らるゝ
所を長き人なりと云ふ

あきなりくろ

仁平元年辛未六月十一日船橋六郷の
地を寄附しぬ。宣爾なり。

神領寄附狀

義久元年己卯四月十六日船橋六郷の地を寄附せし由記せり其文は曰東限覆宮塚南

杏懸北限石枝路
姑是也省て祀る

あり其餘應長應永永亨永祿文龜元龜

建保六年十一月素還法師于時下後國より一以

張金右大

記に実朝公寄^つる^を以^てわ^るを^な納^めな^りあ^らは^せる^を葉^は何^ん其^の當^は宮^はに^て筆^を就^すと^あれ^とも^あら^はせ^る時^はに^て建^たす^を一^つ七^{しち}日^{にち}の^ひ間^ま

和歌とまゝを誤な〜ん千葉何某とあるも又言葉書の注に

本殿の右神林山の麓にたせあふ四方は陽籬を繞らせり

東照大権現宮の法神黒及び大將軍奏進公御持修日本宮
合及安座なり事元和幸間當宮の大宮司富中勢太輔基重仕

全治天海大僧正と云ふ勸請なり。事ると云ふり来由ハ其憚あるを以て

四月十七日
 祭礼
 都鄙
 来り
 弼拜
 同夜
 近里
 童

天正九年辛卯當社序集宮の所々ありあかしあり
 又熱く唄歌ひ踊り也々々あり沈古雅あり習俗あり是を祓負春

春、初穂稻あつて、石葉集、葛飾早稲を貰ふともあり、早
と訓を、此師より稲をせと訓ある人又あへすととあへを秋子

新指を弗く新嘗なりを多し公はさうわし民のたは至るを疑を疑あり今世俗人より前は取分置る弗く持たぬせ成は至るの之を

と初穂取とも此新嘗より登る習俗ある延喜式にも初穂の爲に
奇前より皮律本と訓是江次第曰荷前皆四方國ヨリ進出調荷前

三荷前又三代美録やも新銭を布よなりあつるをいへ茶下は所鑄作

脊と云ふ初穂稻の詠ありて往古郷氏新穀成就の賀宴を做け

大宮司の構は傍てあり
とけとの
一同所々あり
共

のもののとむなり
市饌殿 調進の献場なり
やうとせむのみと
ちやく
ちけとま
ちやく

天皇四十年皇子日本武尊東夷征伐の勅をまり発后

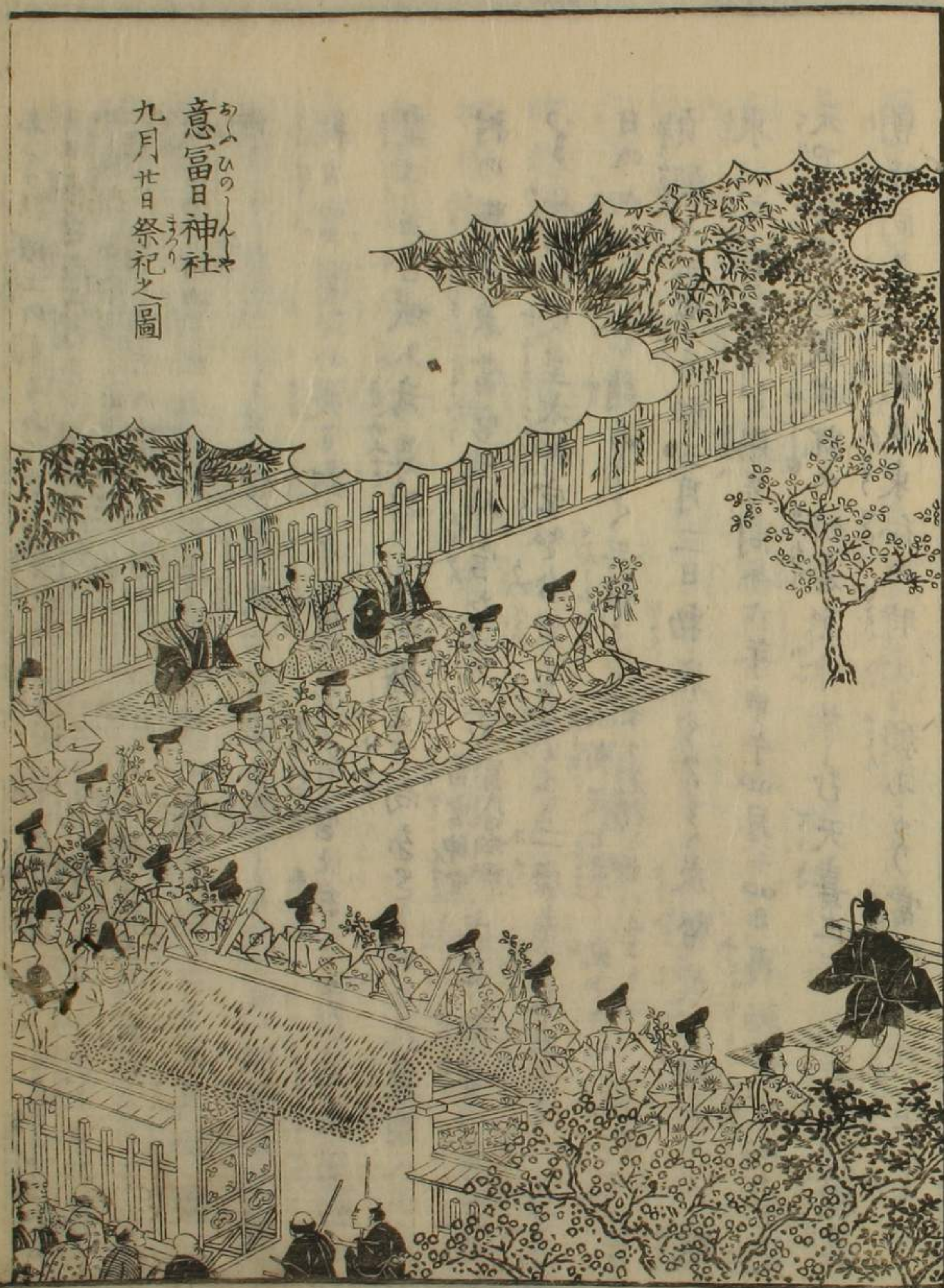
地は於て伊勢大神宮へ凶徒譟伏の所祈誓ありをれハ

は光を現^み一ツの船の中は神幣を採^え漆^し弱木^{じやくも}一面

尊是を得あひ則大神宮の正體と
その人きまういまるくさう
 尊宮の正體と
その人きまういまるくさう
 尊宮の正體と

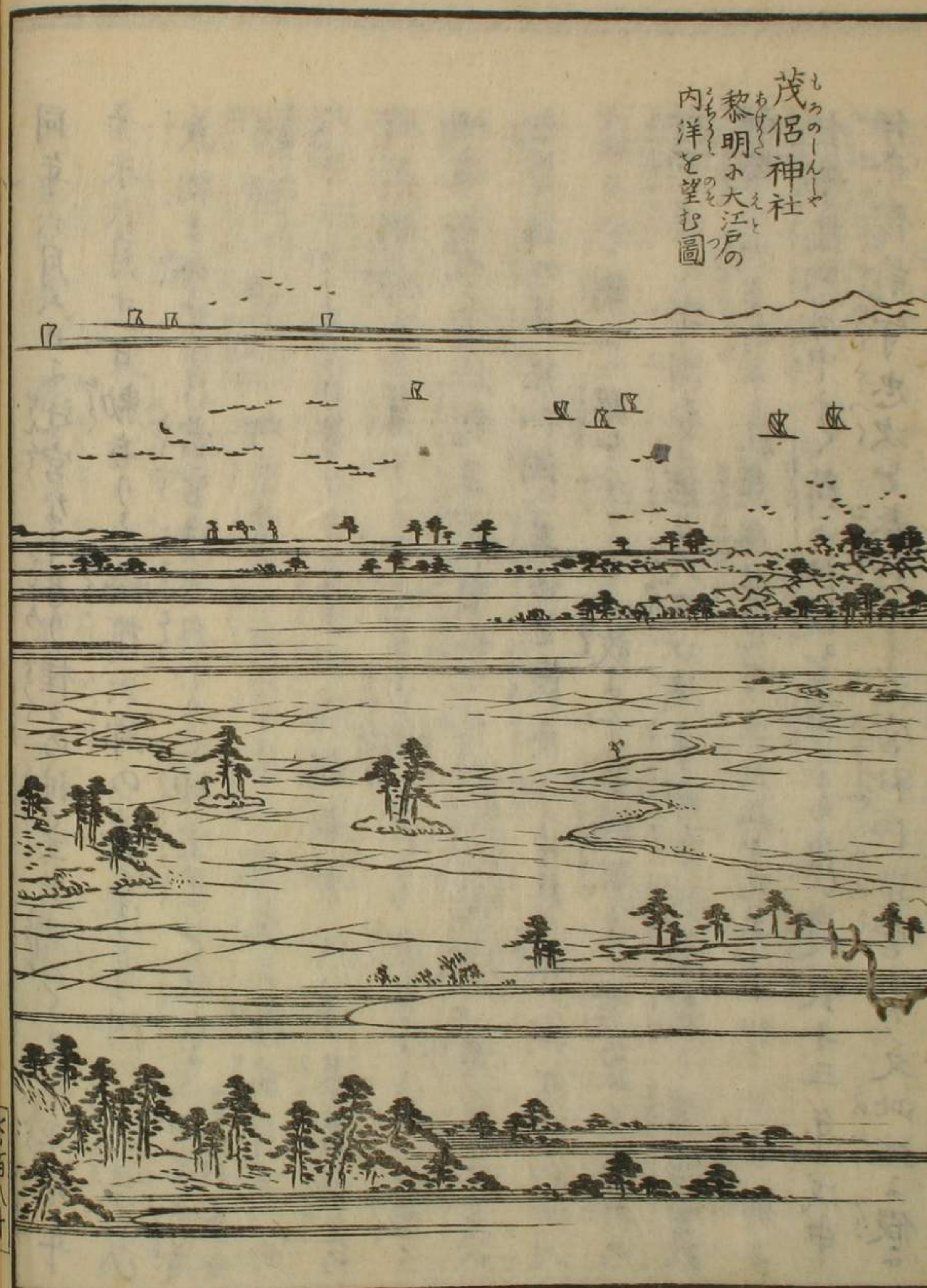
其神鏡ミコタガミ今猶當國の神ミコ正統シユウ之命ノミコト也
 又其時そのとき附つ之命ノミコト也

意富日神社
九月廿日祭祀之圖





茂侶神社
 黎明大江の
 内洋を望む圖



編輯 松濤軒齊藤長秋

校正 男 藤原縣麻呂

全 縣麻呂男 月岑幸成

畫圖 長谷川法橋雪旦

剞劂 東都 佐脇伊三郎 朝倉伊八 宮田六左衛門

此東都名所圖會也
加方家子三在平
徑之るさるる之持れ
其海さ所を繼孝志の
法るる科々要美事
有為みけかあ孝

はふ無き静き心なる
ち何れも静き心なる
さるるに静き心なる
なまらふ心なる
いまだ静き心なる
はつたふ心なる

自れ静き心なる
西なふ心なる
燈乃光き心なる
を也の心なる
物乃本接合心なる
を也の心なる

此の如く申す所は其の如く
等々様々なる交遊中に
あつたことと多し
初めは今更なる所なる
事と爲る事なる事なる
成潔なる事なる事なる

是れ由り来る事なる事なる
の事なる事なる事なる
檢舶来船局官商

上田無憲



荃齋盛義書



拾遺

江戸名所圖會

全五冊

齊藤月岑編述

近刺

長谷川雪旦画圖

東都歲事記

全四冊

全 全

近刻

箱根

熱海

溫泉名勝圖會

全三冊

藤原縣麻呂遺稿

長谷川雪日画圖近刻

同
雪堤補画

天保七丙申青陽

日本橋南一丁目

須原屋茂兵衛

東都書鋪

淺草茅町二丁目

須原屋伊

八



三都發行書林

京都寺町通松原下ル	勝村治右衛門
大坂心齋橋筋唐物町	河内屋太助
同心齋橋筋安堂寺町	秋田屋太右衛門
江戸西國吉川町	山田佐助
同神田鍛冶町三丁目	北島順四郎
同淺草新寺町	和泉屋庄次郎
同芝神明前	岡田屋嘉七
同日本橋通三丁目	山城屋佐兵衛
同横山町三丁目	和泉屋金右衛門
同今川橋本銀町	永樂屋東四郎
同日本橋通二丁目	小林新兵衛
同神田通新石町	須原屋源助
同日本橋通四丁目	須原屋佐助

